

42506

教科書文庫

4
810
44-1941
20000 38644

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

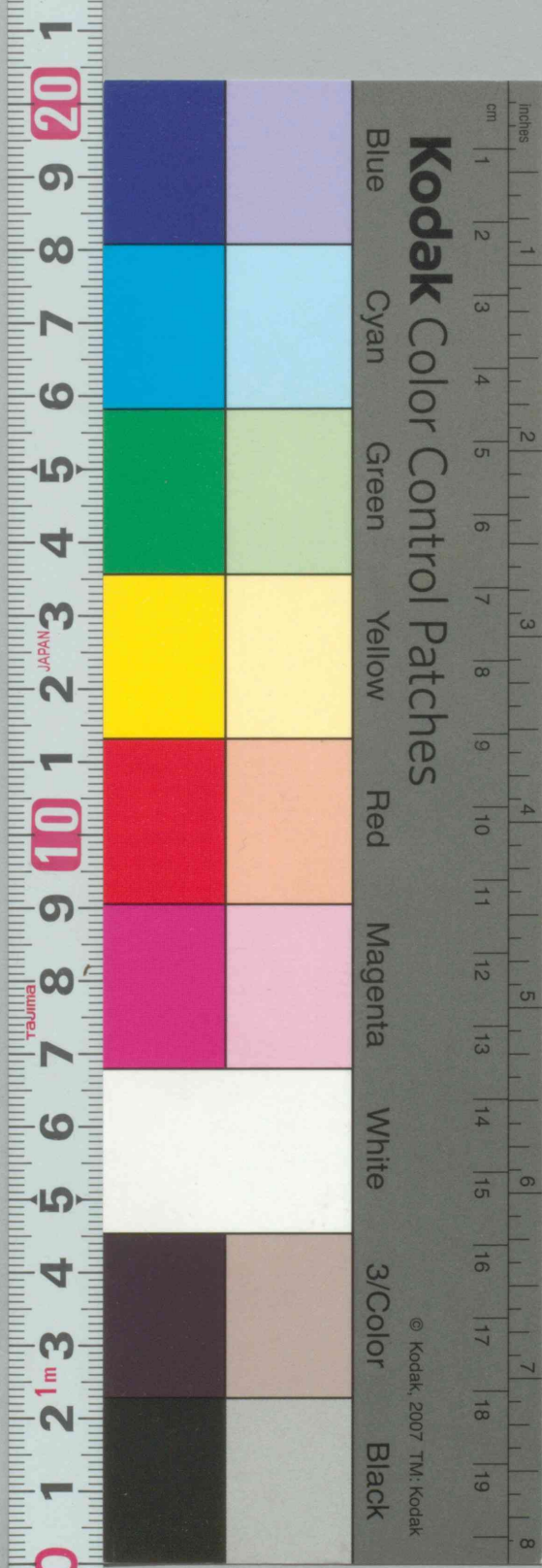


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
810  
44-1941  
2000038644

帝國實業讀本

改制新版 卷六





資 料 室

教科書文庫
4
810
44-1941
2000038644



文 部 省 檢 定 濟

昭和十六年三月十日 實業學校國語科

325.9  
Ha 17

# 帝國實業讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平 訂補

合資會社 富山房發兌

広島大学図書

2000038644







蒙古襲來松本楓湖筆





帝國實業讀本 改制新版 卷六

目次

一 野邊の秋風(古歌).....	一
二 三つの眺.....	三
日本帝國の古名(自修文).....	一〇
三 夜叉王(脚本).....	岡本綺堂...一四
四 樹の根.....	和辻哲郎...二六
五 潮待つ間.....	幸田露伴...三六
六 鈍と根.....	永井 潜...三七
七 ジョン・ウナメーカ.....	郡山幸男...四三
白銅の光(自修文).....	岡本綺堂...五三

目次

一



八 菊(詩).....	中西悟堂 六〇
九 空行く雁.....	(異本會我物語) 六三
一〇 武藏野.....	國木田獨歩 六六
二 今昔さまざま.....	石井 満 七四
自製の英雄たれ(自修文).....	津村秀松 八四
三 冬の山里(古歌).....	九〇
三 吉野の行宮.....	北畠親房 九三
四 最後の参内.....	(太平記) 九七
五 國難と皇室.....	渡邊幾治郎 一〇一
六 自ら助くる者.....	永田秀次郎 一〇六
七 毀譽.....	三浦梅園 一五
八 明淨直その一.....	五十嵐 力 二〇
九 明淨直その二.....	五十嵐 力 二二

光明を尙ぶ精神(自修文).....	清原貞雄 二九
一〇 那須の與一の事.....	(平家物語) 三三
一一 仁は心のいのち.....	室 鳩 巢 四〇
一二 國威八紘に振ふ.....	高島米峯 四五
我等は若い.....	一四五
人生の一樂.....	一四六
國民の富は國家の富.....	一四八
國威八紘に振ふ.....	一四九





(一)鎌倉時代の歌  
撰者千載集の  
年(一)八元久四  
一(二)年九十六  
年(三)年九十四

(二)今の京都市伏  
見區深草の  
一(一)年八元久四  
一(二)年九十六  
年(三)年九十四

(三)江戸時代の國  
學者靜庵の  
と號した人  
戸の號した人  
七(一)年八元久四  
六(二)年九十六  
年(三)年九十四

(四)桔梗ヶ原松本市  
長野縣の  
文(一)年八元久四  
二(二)年九十六  
三(三)年九十四

(五)武田信玄が小  
笠原時とが  
所(一)年八元久四  
得(二)年九十六  
勝(三)年九十四

(六)平安時代の歌  
人善くした  
を(一)年八元久四  
も(二)年九十六  
永(三)年九十四

年六(一)年八元久四  
七(二)年九十六  
三(三)年九十四

# 帝國實業讀本 改制新版 卷六

## 一 野邊の秋風

夕されば野邊の秋かぜ身にしみて  
うづら鳴くなりふか草の里

(一) 藤原俊成

ものゝふの草むすかばね年ふりて  
あき風さむしきちかうが原

(二) 加藤宇萬伎

水の面にてる月なみをかぞふれば  
こよひぞ秋のもなかなりける

(三) 源順

一 野邊の秋風

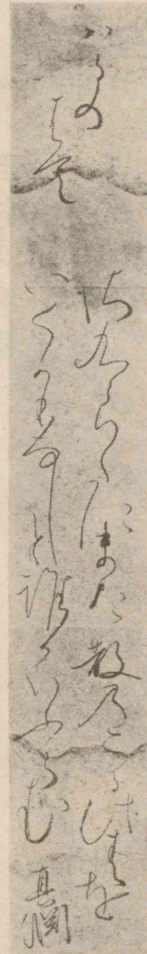
一



(一)鎌倉時代の人物  
藤原資房の参議

した紅葉かつ散る山のゆふ時雨  
ぬれてやひとり鹿の鳴くらん  
いかだしよ待てこととはん水上は  
いかばかり吹く山のあらしぞ

藤原家隆  
藤原資宗



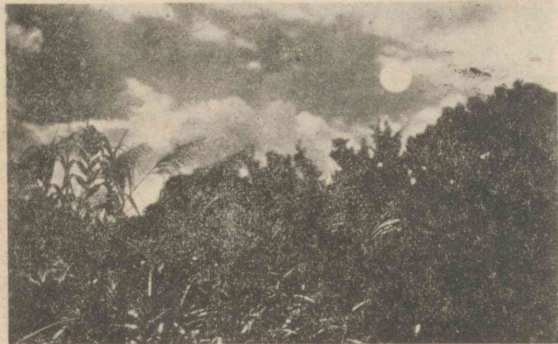
賀茂真淵筆蹟

信濃なるすがの荒野をとぶわしの  
つばさ(一)もたわに吹くあらしかな

はるのほたるは  
さくらたに  
また散のこ  
る此春をい  
くかもなし  
と誰かとい  
らむ  
真淵  
(二)長野縣東筑摩郡歌枕として古來名高い。

二 三つの眺

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として、仰いで見る事も出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない。清涼の光である。皎潔、無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最も



高原の月

もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的

二 三つの眺

煌々、  
群陰皆影を伏す  
有象無象  
詩的情緒



(一)賀茂眞淵の門人荷田蒼生子の歌。

嗟歎感吟

古往今來

情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つてゐる熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷に浸みわたる事は、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。(一)うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千の思なりけりである。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち満ちてゐる。天文學者は言ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を

乾坤を一つにする

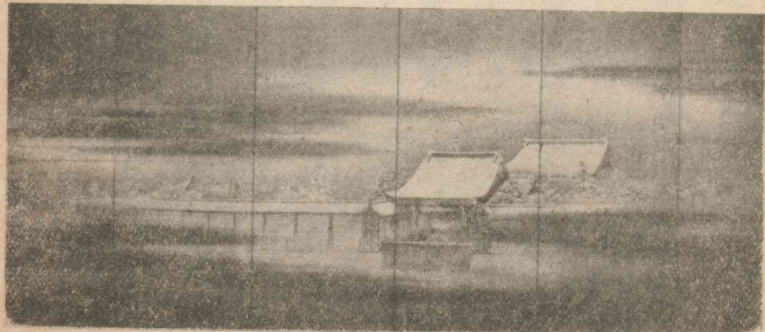
(二)新續古今集、僧仙覺の歌。

(三)唐の詩人白樂天の詩句。

廣寒宮

瓊玉を敷く

以て乾坤を一つにする事は、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。(一)花ならば咲かぬ梢もまじらまじらなべて雪降るみ吉野の山といふやうに、眼に入る物、悉くその下に包まれてしまふ。(二)三千世界銀成色。(三)十二樓臺玉作層の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏にあるの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛紛と飛んで、唯一條の川水を残して、山と言はず、野と言はず、瞬くうちに瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。



(筆華玉田前) 雪の宮皇都京



對照の妙  
造化の巧

よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の咲いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界程、楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花の様々、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは



花もぐり菊池芳文筆

無理はないが、山の花、野の花、何れも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれ程寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花とは縁が切れないのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今の詩歌は擧げるだけ愚か



(一)「年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をみればものおもひもなし」  
〔古今集、藤原良房〕

(二)新古今集、康資王の母の歌。

(三)古今集、詩原深養父の歌。

(四)謡曲「葛城」の句。

である。余は唯<sup>(一)</sup>花をし見ればものおもひもなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つの眺には各その特長がある。何れを前、何れを後と言ふ事は出来ぬ。

やまざくら花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影<sup>(四)</sup>の月を傾け、檐頭の柴には不香<sup>ふきやう</sup>の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。

ガス(瓦斯)不夜城の観

天與の幸福

(一)伊藤仁齋の歌。

(二)唐の宋之問の詩句。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を賞せぬ人もない。思へ、世界の一部分には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を楽しましめる物もない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見る事が出来ない。我等日本人の昔も今もこの三つの眺を擅にする事を得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照す鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。人生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈多。二千六百年來、月雪花三つの眺を有



し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。  
いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

日本文

日本帝國の古名

豊葦原の千五百秋の瑞穂國といふ古名は、我が國の土地の豊饒で、秋には米穀の豊かである事を賞め稱へたのである。葦原といふのに、まだ開拓しない地には、到る所葦が茂つて居つた有様が窺はれる。それを次第に開拓し、開墾して、垂穂の稻の豊熟するやうにしたのは、上代國民の努力によつたのである。皇室に於ても常にこれを奨励し、保護し、これに御心をそゝがせられた事は、歴史に明記されてゐるところである。

崇神天皇の六十二年の詔に、「農は天下の大本なり。民の恃んで生くるところなり」と仰せられて、依網池、刈阪池を作らせられた

豊饒  
食物の澤山ま  
ること。

(一)六二五年。  
(二)大阪市住吉區。  
(三)不詳。

(一)六六六年。  
(二)大阪府(和泉國)泉北郡高石町。  
(三)同府(同國)泉南郡佐野村の北。  
(四)奈良縣生駒郡都跡村。  
(五)同郡片桐村。  
(六)九八六年。  
(七)大阪府(河内國)中河内郡(同府(同國)南河内郡)。  
(八)同府(同國)南河内郡。  
四萬餘頃  
頃(面積百畝のこと)。  
鼓腹する  
食足つて満足してゐる。  
(九)伊弉諾尊と伊弉册尊。

事が見え、垂仁天皇の三十五年に高石池、茅渟池、狭城池、迹見池を始めとして、諸國に八百許の池を作らせられた事が見える。仁徳天皇の十四年には大溝を掘り、石川の水を引いて、鈴鹿豊浦の郊原に灌漑して、四萬餘頃の田を得たとある。後には池溝を掘る爲に、三韓の歸化人を使用された事もある。また雄略天皇の御代には諸國に桑を植ゑさせられ、皇后も蠶事を親らなされたのである。かやうに農事を御奨励あそばされたので、耕地は年々に開けて、五穀もよく實のり、國民は鼓腹して、太平を樂しんだのである。次に大八洲國といふのは、諸册二尊が最初にお産みになつた八つの大島から附いた名であるが、これも今日の意味で考へれば、この八大島が最も早く開けたと言ふのであらう。その後開けた島にはもつと大きいものもあり、近年になつては臺灣島及び澎湖島の全部、樺太島の半分、また朝鮮の全部も我が帝國の版圖に入つたから、建國の昔を思へば、國土の延長は比較にならぬ。



細戈千足國といふ古名もあつた。これには二つの解釋がある。一つは細戈はよい矛の意味で、千足は十分に備つてゐる意味、即ち武器も充實してゐる武勇の國といふ意になる。一つは細戈を枕詞と見て、矛には千といふ物があるから、唯千足と言ふ意味で、萬づ不足のないよい國と言ふのである。近代の學者は大抵第二の説に贊成してゐる。

浦安國とも言つた。平穩安樂の國の意である。

やまとの國と言ふのは、上代は大和國に都せられたので、天皇のいらせられる國の名を貴んで、それを全國におほせて、やまとの國と言ひ、またおほやまとも言つたのである。後に日本といふ漢字をあて、日本をもやまとも訓んだので、日本武尊をやまとたけるのみことと訓んだのもわかる。

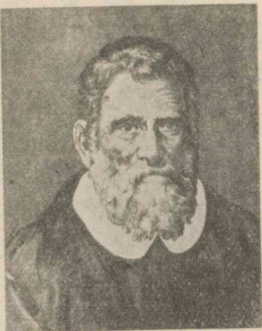
敷島と言ふのも、欽明天皇が大和國磯城郡磯城島に都せられたから、その都の名を大和國の枕詞にして「敷島の大和の國」と言

おほやま  
おほもたせ。

〔第二十九代〕

ひ、やまとが全國の名となつたから、敷島が即ち日本國といふ意味にもなつたのである。

秋津島と言ふのは、神武天皇が高い丘に登つて國見をなされた時、國の形が蜻蛉がしりをなめてゐる形に似てをるから、さう



ローボ・コルマ

言はれたので、これも大和の一部の形勢の名であつたが、遂に全國の名となつたのである。

前に言つた日本も、初めはこれを「やまと」と訓じたが、後には「ひのもと」とも訓み、

また音のまゝ「にっぽん」とも言つた。今の國名は日本國と言ひ、大日本帝國と言ふのである。序に言ふが、英語でジャパンプンと言ふのは、支那の元の頃、忽必烈の朝にゐたイタリーの旅行家マルコ・ポーロが、その頃の支那人が日本をジッパングーと唱へたのを、そのままに記して旅行記に書いたのが初めてである。その旅行記によつ

(一)元の世祖。在位三十五年。至元三十五年。西紀一三二四年。西紀一三二四年。



て、ヨーロッパ人は始めて我が國を知つたので、それが訛つてジャバ  
ンとなつたのである。ドイツ人はそれを自國の發音でヤパンと  
言ひ、フランス人はまた少し訛つてジャボンと言ふ。イタリーでは  
ジャボニイと言つてゐる。

我が日本國は實に美しい稻の豐熟する瑞穂國である。その他  
各種の野菜もよく成熟する。昔の語で言へば、たなつもの(田なつ  
物)はたつもの(畑つ物)の豐熟する國である。氣候は溫和で、植物は  
繁殖する。山青く水清く、到る所風光明媚である。浦安國、細戈千足  
國といふ名のあつたのも無理はない。

### 三 夜叉王

岡本綺堂

登場人物

面教師 夜叉王  
夜叉王の娘 桂

源左金吾頼家  
下田五郎景安

(一)劇作家、名は  
敬二。東京市は  
十四年、昭和十  
八年、歿。

(一)靜岡縣(伊豆  
國)田方郡修  
善寺町にある  
曹洞宗の古刹  
八三三(一利  
建仁三年)に  
八所に頼一  
閉は此所に  
一八六四年  
頼家の獄せら  
れた日。  
(二)伊豆半島の西  
北部なる達磨  
山に發し、中  
禪寺町の中央  
貫流してゐる。

同 楓 修禪寺の僧

時 同  
場 所 元久元年七月十八日

伊豆國狩野の庄修善寺村桂川の畔、夜叉王の住家。  
藁ぶきの古びたる二重家體、破れたる壁に舞樂の面などを掛け、正面  
に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。  
庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、その後は畑を隔て、  
塔の峯續きの山また丘など見ゆ。  
二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をがまきだれおろ  
せり。庭前には秋草の花咲きたり。  
楓、門に立ちて人を見送る體。其所に修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先  
に立ち續いて源頼家卿二十三歳、後より下田五郎景安十七八歳、頼家  
の太刀を捧げて出づ。



僧 これ、將軍家の御おし微行びぢや。粗相があつてはなりませんぞ。楓はつと平伏す。頼家主従進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉王 思ひも寄らぬお成とて、何の設も御座りませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は縁に腰うちかく。

夜叉王 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと、曩にその方を召出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、繪姿までも遣して置いたるに、日を経れども出来せず、幾度か延引を申し立て、今までうち過ぎしは、何たる事ぢや。

五郎 たかが面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せ附けられしは當春の初。その後既に半年をも過ぎたるに、未だ献上致さぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、

らち塔

上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家 余は生れついでにの性急ぢや。いつまで待てど暮せどらち明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣す事無用と、余が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠りをるか。子細を言へ。子細を申せ。

夜叉王 御立腹恐れ入りました。御座ります。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは職の名譽、身の面目、いかでかなほざりに存じませうや。御用承りて既に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意になふ程の物一つもなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引



(面臺舞) 家住王叉夜



のみ鑿

番匠

に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。  
頼家 え、催促の都度に同じ事を……。その申譯は聞き飽いたぞ。  
五郎 この上は唯延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までには必  
ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉王 その期日は申し上げられませぬ。左にのみを持ち、右につち  
を持って、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む  
番匠などとは事變りて、これは生なまなき粗木を削り、男女、天人、夜  
叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打ちこむ面作師。五體  
に漲る精力が、兩の腕におのづから集る時、我が魂魄は流るゝ如  
く彼に通ひて、始めて面も作れます。但しその時が、半月の後か  
一月の後か、或は一年二年の後か、我ながらしかとはわかりませ  
ぬ。

僧 これ〱夜叉王殿、上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御

(一) 靜岡縣(伊豆  
國)田方郡三  
島町にある  
官幣大社。  
うなぎ(鰻)

性急でおはしますぞ。(一)三島神社の放しうなぎを見るやうに、ぬら  
りくらりと取止のない事ばかり申し上げてゐたら、御癩癬が愈、  
募らう程に、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しか  
と御返事を申すがよからう。

夜叉王 ぢやと云うて出來ぬものはなう。

僧 何のこなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、  
伊豆の夜叉王と言へば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王 さあ、それ故に出來ぬと言ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と  
言へば、人にも少しは知られた者。たとひお咎受けうとも、己おのが心  
に染まぬ細工を世に残すのは、いかにも無念ぢや。

頼家 なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟を受けうとも、早急に  
は出來ぬと言ふか。

夜叉王 恐ながら早急には……。



頼家 むゝ、おのれ覺悟せい。

癩癩募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや抜かんとす。奥より桂走り出で、

桂 まあ〜 お待ち下さりませ。

頼家 え、退け〜。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は只今献上致しまする。なう父様と願れども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 なに、面は既に出来してをるか。

頼家 え、おのれ、前後ふそろひの事を申し立て、余を欺かうてな。

桂 いえ〜、うそいつはりでは御座りませぬ。面は確かに出来して居ります。これ父様、もうこの上は是非が御座んすまい。

楓 ほんにさうぢや。ゆふべ漸く出来したといふあの面を、いつそ献上なされては……。

こなた衆

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様にさし上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉王 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、その面を持つて来て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、〜。

楓 あい、〜。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて、少しく解けたる體なり。

桂 いつはりならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家 假面を取りてうち眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

頼家 おゝ見事ぢや。よう打つたぞ。



五郎 上様おん顔に生寫ぢや。

頼家 むゝ。

と飽かずうちまもる僧はしたり顔に、

僧 さればこそ言はぬ事か。これ程の物が出来してゐながら、とかう澁つてをられたは、夜又王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

夜又王容を改めて、

夜又王 何分にも我が心になはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方も御座りませぬ。方々にはその面を何と御覽なされます。

頼家 流石は夜又王、あつばれのものぢや。頼家も満足したぞ。

夜又王 あつばれとの御賞美は、憚ながらおめがね違ひ。それは夜又王が一生の不出来。よう御覽じませ、面は死んで居ります。

五郎 面が死んでをるとは……。

あやかし

夜又王 年來數多打つたる面は、生けるが如しと人も言ひ、我も許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きてる色なく、魂魄もなき死人の相……。それは世にある人の面では御座りませぬ、死人の面で御座ります。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には、やはり生きてる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜又王 いやゝ、どう見直しても、生ある人では御座りませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈あやかしなんどの類……。

僧 あゝこれゝ、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊有難く御禮を申されい。

頼家 むゝ。とにかくにもかくにもこの面は、頼家の意にかなうた。持ちかへるぞ。



安堵す

夜又王 たつて御所望と御座りますれば……。  
頼家 おゝ所望ぢや。それ。

頸にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ、桂箱を捧げて庭におり立つ。

僧 やれく、これで愚僧も先づ安堵致した。夜又王殿、明日また逢ひませうぞ。

頼家 頼家行きかゝりて、物につまづく  
おゝ、いつの間にか暗うなつた。

僧は進み出で、桂に雪洞を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。

夜又王はじつと思案の體なり。

楓 父様、お見送を……。

夜又王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は改めてきたするぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜又王起ちあがつて、しばし黙然として沈思しゐたりしが、やがてつかく縁に上り、細工場よりつちを持ち來りて、壁に掛けたる種々の假面を取りおろし、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取りすがりて、

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜又王 せつば詰つて是非に及ばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜又王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑をのこさば、一生の名折、末代の恥辱。所詮夜又王の名は廢つた。職人も今日限り、再びつちは持つまいぞ。

楓 さりとは短氣で御座りませう。いかなる名人上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生のうち一度でも、あつばれ名作が出

せつば詰る



來ようならば、それが即ち名人では御座りませぬか。

夜叉王　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

とすがりて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を閉ぢたり。

日暮れて、笛の音遠く聞ゆ。

— 綺堂戯曲集 —

### 四 樹の根

和辻哲郎

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へてみたことがなかつた。美しい茶褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の

(一) 哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。明治三十四年(一九〇一年)生れた。兵庫縣に生れた。

樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落著いた。潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙にぬれたやうなしをらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうなさわやかな氣分が樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜が其所に躍つてゐるやうに感ぜられる。をりふしかはいゝ小鳥の群が活き／＼した聲で囀り交して、緑の葉の間を樂しさうに往き來する——それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所にたゞずんで、砂の中にくひ込んだ複雑な根を見る事が出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐる事だらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先をそろへた針葉と、——それに比べて地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力を盡したやう



に、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱き附いてゐる。私はこのやうな根が地下にある事を知つてはゐた。しかし、それを目の前にまざく／＼と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼等にある事を、一度も自分の心臓で感じた事がなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しむ顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫聲や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に復つて、苦しみの痕をめぐつたに後へ残さない。しかも彼等は、我々の眼に秘められた地下の營を、一日も怠つた事がないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實にこのやうな苦勞の上への

み可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押し付けられた。なる程これは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく／＼敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて平野から切離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たかわからない老樹たちは、金剛



不壞といふ言葉に似つかはしい程な、どつしりとした、迷のない、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた／＼と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地中の烈しい營は、既に地上一尺の所に明らかに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い強靱な根は力限り四方へ擴がつて、地下の岩にしつかりと抱附いてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入混つて、薄い地の層の間に複雑にからみ合つてゐる有様は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。

確かに山は烈しい生の力の營によつて、残る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、

しかし、一種の靈氣として感ずる事は出來た。隠れた努力の威壓が神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營に没頭する事を自分に誓つた。今氣附いてもまだ遅くない。

成長を欲する者は、先づ根を確かにおろさなくてはならぬ。  
上に伸びる事をのみ欲するな。先づ下にくひ入る事に努めよ。

壯年にして成長の止る人がある。根を疎かにしたからである。  
四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下にくひ入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解の良い頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆と



勞作

を持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きる事の苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか——私には彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れるはずはない。

古來の偉人には雄大な根の營があつた。それ故に、彼等の仕事は味はへば味はふ程深い味はひを示して來る。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定

の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸す事が出来ない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れるはずがない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬である事を考へてみななければならぬ。

根の爲には、出来るならば地の質を選ばなくてはならぬ。

果實の爲には、出来るならば根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。

根に對する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好むところの土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根



に供給してやるのが、教養の任務である。それが植木鉢に墮するか否かは、人の問題であつて、制度の問題ではない。

教養は培養である。それが有効である爲には、先づ生活の大地にくひ入らうとする根がなくてはならぬ。

人々は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸収する力のない所では何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが、我々の前に乏しいとは思はない。唯それに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。

— 偶像再興 —

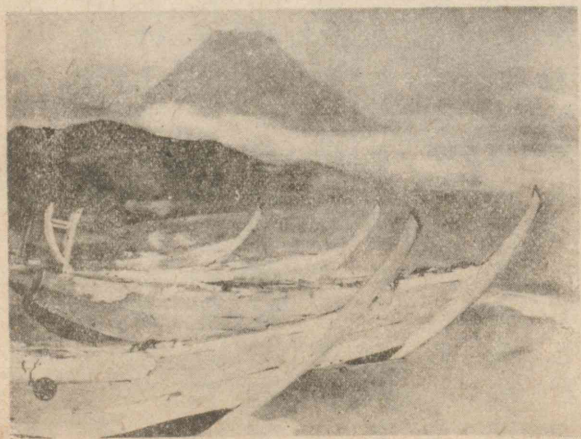
〔文學者、文學博士。名は成行。慶應三年（一八五二年）江戸に生れた。〕

### 五 潮待つ間

幸田露伴

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん途なく、あだに心の焦らるゝものなり。

嘗てこの事を言出で、さるをりにも何とかなすべき手段はなきにや」と年老いて物事にいと巧者なる舟人に問ひけるに、舟人はうち笑ひ、「いつにても纜を解かんとらば、いつにても水ある所に船を繋ぐべし。我等は繋ぐ時には解く事を思ひて繋ぎ、解く時には繋ぐ事を



(筆子龍端川) 舟の渴干







毒忌

べまい。

と斷つた。間もなく首を刎ねられる身で毒忌もをかしいと、傍の者が嘲つたのを聞いて、三成は微笑しながら、



石田三成

「お前たちがさう思ふのも無理ではないが、大義を志す者にあつては、たとひ間もなく首を落されるにしても、いよくの時までは命を大切にし、どうかして本意を達しようと思ふのが道である。」

と言つたが、家康がこれを聞いて憐んで、緞子の夜著を贈つて來た時、三成は決然としてこれを斥けて言つた、「敵人の恩恵に浴してまでも我が生を貪る心はもたぬ」と。三成たる面目が躍如としてゐるではないか。誠に爲すある人間の心掛は、常人と異なるもののある事を深

面目躍如

く感ぜしめる。

昔から、立身出世になくしてはならない條件として、運、鈍、根の三つを數へて來たが、生活が行詰り、餘裕が少くなつた近頃では、それに金を加へんとする者もあるやうである。

運とは人力で如何ともし難い、少くとも如何ともし難く見える自然の命數を引きくるめたもので、神ならぬ人間では、出世の準備にしたくも、どうにもならないものかも知れぬ。さりながら、物情の向背を洞してその機を握り、陰陽の消長を察してその運に乗ずると昔の人も教へてゐるやうに、周到であり機敏である事によつてこの大切な運をつかむ事は、或程度まで不可能の事ではなからう。

次には、何事も營利主義の現代の社會生活では、金が非常な威力をもつて、立身出世の助になる事は言ふまでもないが、しかし、多くの場合にあつては、金を儲ける事それ自身が、立身出世の重要な一



兒孫の爲に美田を買はぬ

得意恬然  
失意泰然

方面をなしてゐるのであるから、初から金力をもつて競争場裡に臨んだのでは、たとひその優者となつたところで、金の上に金の鍍金をするやうなもので、それでは一向に精華なく、光彩なく、痛快味がない。しかも金を持つてゐるが爲に、或は金の奴隸となり、或は金の爲に軟化して、却つて立身出世を妨げる場合も少くはないのである。この事は、古往今來、偉人傑士が多く貧賤な階級から崛起してゐるのを見てもわかるし、また心ある人士が、兒孫の爲に美田を買はなかつた理由も首肯されるのである。して見ると、立身出世の大切な準備は、所詮は鈍と根との二つに歸著すると言ふべきである。そして、鈍の根とは、畢竟するに體力の問題に外ならぬ。體力旺盛で心身が常に健かであれば、心廣く體ゆたかであつて、物事に動ずる事がない。いはゆる得意恬然、失意泰然で、得る事があつても調子に乗らず、失ふ事があつても敢へていぢけず、自若として終始正し

きに居り、正しきに處する事が出来る。これ即ち鈍の成功に大切な所以である。

節度を失ふ  
世と相容れず  
明々白々

これに反して、體力は萎靡し身體が虚弱であると、精神もおのづから萎靡し、心身が鬱屈すると必ず神經過敏となり、事毎に焦躁憂苦して進退常に節度を失ひ、或はひたすら感情に馳せて輕舉妄動し、或は猜疑嫉妬して世と相容れず、必然失敗の谷底に陥るのである。殊にこの關係は、劇甚な生存競争の渦中に喘ぎつゝある近代人に取つて、最も大切な意義をもつてゐる。更にまた、根が完全な健康によつて始めて保持される事は、明々白々であつて、改めて言ふまでもないのである。

人が世に立ち志を遂げる上に、かくばかり大切な關係をもつところの體力は、その人が既に或程度の成功を収め、活動の地位を得て、その材に應じその分に隨つて、世道の進運に寄與し、人生に裨益

裨益する



(一)アメリカの文  
學者、哲學者  
三年一八八〇  
二年

(二)著述家、廣  
告研究家、印  
刷術師、明  
治五年(一八七  
四年)に生れた。  
島根縣五箇山  
に生れた。  
(三)キリスト教の  
信者がキリス  
トの誕生を祝  
ふ祭。毎年十  
二月二十五日  
に行ふ。  
(四)愛府。アメ  
リカ州のペン  
シルヤ州の首  
都。

するとところあらんとする場合、一層大切になつて来る。エマソンが言つたやうに、「人間第一の財産は何と言つても健康である。若し健康でなかつたならば、人生は唯暗黒あるのみである。一切の名譽も、財寶も、權力も、何等の光彩、何等の幸福をもかち得ないのである。

——人及び人の力——

### 七 ジョン・ワナメーカー

郡山 幸男

(三) クリスマスが近附いた或日のこと、フィラデルフィヤ市のとある街の貴金屬店に見すぼらしい身なりをした、虚弱さうな一人の少年が入つて、頻りに飾棚をのぞいてゐたが、やがて一つの襟飾を選んで買つた。店員がそれを包む間に、尙あちこちと見廻してゐた少年は、更に好ましい品を見附けたので、前のとの取替を頼んでみた。ところが「もう取引は済んだのだから」とて、素氣なく斷られた。少年は

(一)西紀一八三八  
年一八九二

(二)週給  
リンカ  
の執  
政中  
大統  
領の  
存廢  
問題  
を理  
由と  
して  
南部  
と北  
部の  
間に  
起つた  
一八  
六一年  
西紀  
一八  
六五年  
開戦  
一八  
六五年  
休戦

寂しい心持を抱いて、店を立去つた。

これは後年、小賣組織の革新者となつて、信念の巨商と萬人に憧憬されたジョン・ワナメーカーが十四歳の時の姿である。始めて週給一ドル二十五セントにありついた年の暮、慈愛深い母親への心か



ジョン・ワナメーカー

らなる買物をした時の姿である。

いつしか十年を經過して、南北戦争の火蓋が將に切られんとして、人心は不安に戦き、財界は一大パニックに襲はれ、街には今に草が生えるぞとやはさされてゐた時に、フィ

ラデルフィヤの目抜の場所に、せつせと開店の準備を急いでゐる者があつた。その板圍をはじめ、附近の空地の板壁といふ板壁には、墨痕鮮かに「W.M.C」の三字が、途方もなく大きく書かれたので、行交ふ人々は、何れも奇異の目をそばだてた。



奇智が閃く

さて、愈、蓋が明けられたのを見ると、それは「ワナメーカー及びブラウン商店」で、青春二十三歳のワナメーカーが、義兄ブラウンと共に、始めて旗揚をした紳士服店であつた。ミヤロの三文字は、彼等が姓の頭文字を列ねただけに過ぎなかつたのだが、殊更にこれを大きく書いて人目を惹いたところに、廣告の天才と稱せられた我がワナメーカーの奇智が先づ閃いたのである。

この紳士服店の第一日の總収入は、二十四ドル六十七セントであつたが、後年、一日に百萬ドルの賣上記録を作つたワナメーカーは、流石に大膽であつた。彼は端錢六十七セントを翌日の釣錢にと取除け、残りの二十四ドルを持つて急いで新聞社へ行つて、廣告を依頼した。

「紳士服一著そろつて三ドル」といふ大廣告が、翌日の新聞に出て人目を惹いた。いかに物價の安いその頃でも、一著そろつて三ドル

破天荒

商策

とは破天荒の安値であつて、殆ど利益はなかつたのだが、一には新店の廣告、二にはたとひ薄口錢でも、品がさばれば資金の回轉率が高まるので、結局は高利率になると見込んでの新商策であつた。次の廣告には、値段に二つなしたつた一つ「返品御自由、返金も致します」と書いた。十年前、貧しい少年が、クリスマスを買物で嘗めた苦い經驗と寂しい心持とが、茲に大きな教訓となつて反映して來たのであつて、やがてまた、これが全米國の小賣組織に革新をもたらす一大動機ともなつたのである。

「お客は常に正しい」といふ廣告句は、ワナメーカーが特に著作権を請求した程に愛したもので、屢、繰返して廣告中に挿入すると共に、店員訓育の資料ともした。お客は目が高い。何事にまれ、少々無理を言はれても、それには何か教訓があるはずだ。お客は常に正しい」と言つて、彼は店員たちを戒めたが、これもまた、例のクリスマスの



買物が與へた尊い教訓であつた事は、言ふまでもない。彼が決して経験をむだにしない人であつた事は、少年時代の一つの経験に懲りて、「借金せぬ主義」を生涯立通した事實によつても證明される。

彼は僅かに十歳で既に父の煉瓦焼の手傳をしなければならなかつた程に貧しい家に生れたのだから、始めて幾らかの給料を得るやうになつた時にも、その大部分はこれを一家糊口の資に供して、餘裕と言つては殆どなかつた。にも拘らず、赤革表紙の立派な聖書一卷を月賦拂で買入れた。その代金は二ドル七十五セントで、後年自ら「最初の最大なる買物にして最大なる負債」と語つた程に、當時の彼には大きな事件であつた。彼はこれを皆濟するのに實に一年半を要したが、その間の苦しみは非常なもので、眞に骨身にこたへたので、その後は、いかなる場合にも決して借金しないと、いふ主

皆濟する  
骨身にこたへ  
る

義を通した。

さて彼の事業は、誠實と、奉仕と、これを有力に表現する奇策とで、爾來急速に、しかも確實に發展して、彼が齡七十に垂んとする千九百七年の頃には、フィラデルフィヤ及びニューヨークの二大都に大店鋪を有し、従業員實に一萬三千餘人、ワナメーカー商店の名は、獨り米國のみならず、世界の商界を壓するの概があつた。その時フィラデルフィヤ本店は、總面積二百萬平方フィートの新建築にかゝつて、その完成に近附きつゝあつたが、ニューヨークの支店もまた、これに劣らない程の新館の建築を進めてゐた。



店貨百一カーメナワ

壓するの概が  
あつた



(1) スベイン領キ  
ユーバ島の叛  
亂に際し、そ  
の鎮壓を理由  
としてアメリカ  
カ合衆國とス  
ペインとの間  
に行はれた戦  
争。西紀一八  
九八年。

喧傳する

豪語する

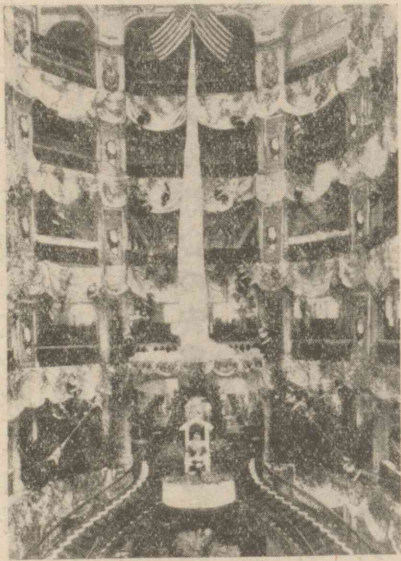
決濟する

證左

をりしも襲つて來たのが、米西戦争の恐しいパニックである。さら  
でだに同業者が嫉視の的となり、悪宣傳の行はれてゐた時に、少  
らぬ資金を固定せしめたのであるから、ワナメーカー破産のうは  
さは一時に喧傳された。流石に精悍な老ワナメーカーも、この時  
かりはその打撃のひどさに内心大いに驚いたらしかつたが、でも  
尙、有利な買収の申出には耳を藉さずに、ワナメーカーの名は賣る  
爲の名ではない」と豪語して、孤軍奮闘、縦横の奇策を運らし、遂に二  
千萬ドルに近い手形を決濟した。しかもこの時ですら、彼は保險會  
社が金融機關である事を知らなかつたと告白して、世間を驚かし  
た。借金せぬ主義を立通した一證左である。

既に一貧窮兒にして、尙聖書を最初の最大の買物とした程の彼  
である。その生涯は全く信仰に終始した。考へて、試みて、努めて、後は  
神様にお委せする。これが私の生涯だ。と彼は言つたが、事實、これが

(2) 第二十三期  
大統領。(西紀  
一九〇三年)



部内の店貨百一カーメナワ

彼の事業遂行と處世との原則であつた。二十歳の時に、フィラデルフィ  
ヤの貧民窟にベタニヤ日曜學校を開いて以來、常に神への奉仕を  
怠らず、世界日曜學校協會長、フィラデルフィヤ青年會長をはじめ、教界  
に貢獻したところもまた多  
大であつた。遂にその手は廣  
く諸外國にまで延び、我が京  
都青年會館は千九百九年に、  
京城青年會館は千九百十三  
年に、何れも彼の寄附によつ  
て成つた。これより先、千八百  
八十九年、大統領ハリソンの下に遞信大臣となつた時にも、彼はベ  
タニヤ日曜學校への出席をば第一條件としたが、自己の店務は、在  
任四年間は全く見なかつた程である。



(一)カーチス出版  
會社の副社長  
兼編輯長であ  
つた。

されば常に同業者をして、その奇策端倪すべからずと、歎ぜしめ  
た彼の販賣策や、これを擴充する廣告もまた、悉く信念の告白に外  
ならなかつた。彼はその廣告の中に屢、論説を掲げて輿論の指導に  
力め、また常に廣告文の終に自署して、責任を明らかにした。廣告文  
に著作権を附する事も彼の發意である。今日、米國の多くの信用す  
べき新聞雜誌に掲載される廣告が、悉く嚴格な審査を経て、信ずべ  
からざる物、社會の安寧に害ある物が全く跡を絶つに至つたのは、  
主として婦人雜誌「レディーズ・ホーム・ジャーナル」の主筆であつた故エ  
ドワード・ボックの努力によるのであるが、また我がワナメーカーと、  
彼の爲に廣告立案の任に當つたパウロズとに負ふところが大で  
あつた事は、米國廣告界の一般に承認するところである。

奉公の念に厚かつた事もワナメーカーの一大特色である。米國  
が歐洲大戰に参加して以來、五回に互つて募集した自由公債に、彼

自ら應募したものの二千萬ドル、別に店員の應募したものを加へて、  
實に六千萬ドルに達した。後、店員にしてこれを現金に替へん事を  
乞ふ者があると、いかに時價の暴落した時でも、彼は額面通りに買  
つて、店員に應募を勧めた責任を明らかにした。

また大戰が止んでも尙異常な物價騰貴の續いてゐるのを見る  
と、彼は後繼者ロドマン・ワナメーカーをして、物價引下の急先鋒た  
らしめた。即ち先づ二千萬ドルに値する在庫品の正價二割引の販  
賣を宣言せしめ、尙足らずして、新たに一千三百萬ドルの商品を仕  
入れて、一箇月に互つてこれを續行させた。これによつてワナメー  
カー商店の失つたところは、實に一百萬ドルを遙かに超えたと言  
はれる。

創業六十周年、頽齡八十三歳の時に、人の彼に向つて健康を祝す  
る者があると、「幸福にも忙しい」と警句を以て答へて、彼は尙社會奉

(一)ジョン・ワナメ  
ーカーの次男。  
現店主。

警句



(一)フィラデルフィヤ市廳に隣接してある。  
(二)イギリスの宗教家。ペンシルバニア州の開拓者。西紀一七六四年—一七八年。

ポンド(封度)

仕の可能な意氣を示した。  
今日我々外國人が米國に遊んで、千七百七十六年かの十三州の名士たちが獨立を宣言した地であるフィラデルフィヤに入り、先づ獨立閣その他二三の名所舊蹟の見物が終れば、人は必ずワナメーカ<sup>(一)</sup>一商店の觀覽を勧める。市廳の高塔の上に、開拓者ウイリアム・ペンが像を仰ぎ見つゝ、宏壯な店舗に入ると、忽ち我等の耳目を奪ふ物は、同店が自らグラント・コートと命名した大廣間の壯觀と殷賑とである。其所にはその重量三十七萬五千ポンドといふ世界最大のパイプオルガンをはじめ、珍奇な物の數々あるが中に、一つの大理石柱に、左の如く譯せらるべき章句が、金文字で鮮かに刻まれてあるのを見る。

我に従ふ者をして、名譽たる鉛垂と、眞理たる平準器と、誠實たる規矩とを以て、教養、慰勸、互助を不斷に築かしめよ。

ジョン・ワナメーカ

これぞ彼が、その後繼者及び従業員に對する永遠の戒告であり、希望であるばかりでなく、また實に、彼自らの覺悟を示し、その全生涯を語るものなのである。



白銅の光

岡本綺堂

何事につけても世界第一を誇らうとするニューヨーク人は、更に誇つてよい物を近年二つまで見出した。その一つは、新しく出來たホテル・ペンシルバニヤで、部屋が二千二百浴室が同じく二千二百。成程、これは世界第一と誇るに足る値があらう。もう一つは、少し以前に出來上つたウールウォース・ビルディングで、雲を凌ぐ五十八階の高塔。これにも世界第一の賞牌を與へてよからう。その高い塔の持主のフランク・ウールウォースは、千九百十九年四月三日に六十八回の誕辰を迎へて、その七日の午前一時には、<sup>(三)</sup>ロン

(一)ニューヨーク市に聳える著名な摩天樓。二名は十餘年前までは世界最高のものである。現存のものは、同市の建築家、ウィリアム・ワットソン・テイラーが設計したものである。  
(二)アメリカの實業家。西紀一八五二年—一九一九年。  
(三)ニューヨーク州の島。



グ・アイランドの自邸でこの世界に永久の別れを告げた。彼の名の高いのは、ビルディングの塔の高い爲ばかりではない。それだけならば、金持なら誰にでも出来る事かも知れない。ウルウォースの名が小兒にまでも知られてゐるのは、白銅の光の爲である。五セントの白銅一箇で殆ど何でも買へるといふデパートメント・ストアを經營してゐる爲である。今日では、物價騰貴の爲に、商品は五セントと十セントとの二種に分れてゐるが、決してそれ以上に越えない。その上その特色は、決して廉からう、悪からうの粗製品を賣らないといふ點にある。物價の高い米國で、五セント、十セントの商品だけを賣つて利益を得ようといふのは、随分困難な仕事に相違ない。果して彼は幾度か失敗した。それでも根強く押通して、今日の彼は英米に跨がつて千五百有餘の支店を有し、一年の總賣上高は約七億ドルと傳へられてゐる。ウルウォースの名が到る所に喧傳されるのも無理はない。

(一) ニューヨーク州の都邑。



スーウルーウ

千八百五十二年四月三日に、ニューヨーク州のロッドマンに生れた彼は、貧乏な一農夫の子であつた。かういふ人物の青年時代が貧苦と奮闘との歴史に満ちてゐる事は、昔からその例に乏しくない。彼もやはりその一人で、彼自身の話によると、「私の家の貧乏はお話にならないくらいで、どんなに寒い冬でも、オーバーコートを買ふ事も出来ない時があつた」さうである。それでも彼は小學校を卒業して、商業學校に二年程通ふ事が出来た。彼は農家の育ちながら、自分は商人になるか機關士になるか、それより外に歩むべき道はないと考へたので、十八歳の時に、自分の村から七マイル程離れたカーセージへ奉公口を探しに出たが、どの店でも、この貧乏な青年を相手にしてくれる者はなかつた。彼は粗末な農夫の衣服を着て、カラーさへも著けてゐなかつたのであつた。



(一) ニューヨーク州の市。

(二) ニューヨーク州の市。

しかし、彼は根氣よくそれからそれへと捜し歩いて、やう／＼の事で、グレート・ベンドといふ小さい村の雜貨店に雇はれる事になつた。其所の主人は村の停車場の驛長を勤める傍、商店を開いてゐたので、彼は店の商品の外に、汽車の切符をも賣らせられた。但し、其所では唯食はしてもらふだけで、給料は一文ももらへなかつた。ウールウオースが始めて一週間に三ドル五十セントの給料をもらふやうになつたのは、二十一歳の年に、グレート・ベンドを立退いて、ウオータータウンのオーグズベリー・ムーア商會に雇はれた時であつた。此所では主人の命令で、流石の彼もカラーを買はなければならぬ事になつた。

ウールウオースは二十五歳の六月に、同じ町のジェニー・クレイトンといふ婦人と結婚した。その時には、給料も毎週十ドルに昇つてゐたが、夫婦暮して一箇月四十ドルの収入では、その時代でも決して安樂ではなかつた。彼は苦しい中から多少の貯金を作ら

うとあせつてゐるうちに、過度の勤勞の爲にひどく健康を傷めたので、據よんどころなく自分の職業を抛つて、ひと先づ故郷のロッドマンに歸つた。しかも彼は病軀を抱へて、何かの機會を狙つてゐた。その間にふと眼を著けたのが、かの「五セント商店」であつた。

勿論これはウールウオース一人が特に思ひ附いた事ではなかつた。その當時、この「五セント商店」をもくろんだ者は他にも大勢あつた。彼等は皆相當の資本をもつてゐたが、ウールウオースは身代を振つて、たつた五十ドルの資本を作る事が出来ただけであつた。五十ドルでは、到底大勢の競争者と闘ふ事は出来ない。第一、店を開く事すら困難なのである。彼は無理工面くめんをして、やう／＼三百ドルの金を借出して、自分の有金五十ドルと併せて、三百五十ドルの資本を作つた。かうして始めて、ユーチカの町に「五セント商店」を開業したのは、彼が二十六歳の春で、商品の仕入と開業費とに三百四十五ドルを費してしまつて、開店の朝、彼のポケット

(一) ニューヨーク州の市。



に残つてゐたのは、たつた五ドルであつた。かういふ大膽な事業にも幸に彼は成功した。他の競争者が續々倒れる間に、ウールウォォイスの店だけは益々繁昌して、更にペンシルバニアのランカスターに移轉した所、成績が良かったので、更にハリスバーグに支店を開いた。しかし、これは思はしくなかつたので、間もなく閉店して、今度はやはりペンシルバニアのヨークに新しく開業したが、これも失敗して、三箇月後には閉店の憂目を見るやうになつた。かうして色々の損失が續いたが、ランカスターと、もう一つスクラントンにある店だけは辛くも持ちこたへて、奮闘してゐた。「何でも構はずに進まなければいけない。倒れたらまた起きて進むのだ」これがウールウォォイスの主義であつた。彼は幾分か、融通が出来ると、更にまたペンシルバニアのリーディングに支店を開いた。これは幸に好成績を挙げた。かうして約十年を送る間に、五セント商店の信用は段々に高まつて來た。五セントでは到底ろ

「ペンシルバニア州の市」ニ

歴々  
明らかなさま。



(央中)グンデルピスウォール

くな品物を賣るはずがないと侮つてゐた人たちも、いつの間にかその店の窓をのぞくやうになつた。かうして店は日ましに繁昌して來たが、彼は少しでも餘裕が出来ると、到る所に支店を開く事を忘れなかつた。それと同時に、成るべく商品の種類を殖す事も怠らなかつた。どうにかかうにか五セントでも我慢して賣られる程度の品物は、何でも構はず仕入れて、店に列べた。その後の事は一々書くまでもない。彼が二十六歳で始めて「五セント商店」を開いてから、丁度四十年目の今日では、前にも言つたやうに、千五百有餘の支店を有するやうになつたのを見ても、その成功の跡は歴々と認められるであらう。彼が現在の資産は



(一) ニューヨーク市のマンハッタン区を約八キロメートルに貫つて南北に大通の最中心をなす。

(二) 詩人。明治二十五年(一八九二年)に生れた。

六千五百萬ドルに上ると傳へられてゐる。彼はその成功の記念として、ニューヨーク市を飾る爲に、いはゆる世界第一のウールウォースビルディングをブロードウェイの繁華な巷に建てた。建物は地上から塔の頂上まで七百九十二フィート。その構造の詳細は、載せて一卷の書物になつてゐるくらゐであるから、今此所で簡単に紹介する譯にはいれないが、ともかくも大通の眞中に突つ立つて、ニューヨーク全市を眼下に見おろしてゐるこの巨大な建物が、根氣よく白銅一箇づつを積立て、出來上つたものである事を忘れてはならない。

八 菊

(三) 中西悟堂

麗かな菊の園を私は歩きまはる。  
高貴な花の間を、  
優雅な香の中を、  
王子のやうに爽かに歩きながら、  
私は日本の花の王を讃へる。  
何といふ清淨な誇らかさ、  
何といふ美しいしとやかさであらう。  
純白な花、黄いろい花、  
伸びた花びら、卷かれた花びら、  
花は花に隠れ、花は花から秀でて、  
鮮かに優しく、  
寶石のやうに日の光に浮ぶ。



うたげ

清潔な祭のやうな、神聖な彫刻のやうな、  
尊い、畏い日本の花よ。  
あゝ、鶴のやうな心になつて、  
この日本の花の王のうたげの中を、  
秋の日のうたげの中を、  
爽かに私は歩きまはる。

九 空行く雁

頃(一)は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立返り  
て一萬は九つ箱王(二)は七つにぞなりにける。ある夕暮、箱王は母の膝  
の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。誠  
やらん、父の御事は佛になつてましますとや。その佛はいづくにま  
しますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ」と言ひけれ

(一)一八四一年。  
(二)兄曾我十郎祐成の幼名。  
(三)弟曾我五郎時致の幼名。  
させ給へ

(一)夫祐泰の死後曾我祐信に再嫁した。  
(二)祐信。

(三)祐信。

(四)源頼朝。

(五)相模國(神奈川県)足柄下郡下曾我村。

ば、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりなり。  
母泣くく、宣ひけるは、「あの曾我殿(一)こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ途にて工藤一藪(二)とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らずや過ぐらん。など大人しく語りければ、母より始めて



(繪挿本版古) 弟兄我曾



かりがね

人倫

(三)三郎祐泰

小賢しく

女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは「あれ見給へ箱王殿、空を飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしませば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我等より幼き者にて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありく事の羨ましきよ。これ等の事ども思ひ續くれれば、いつもよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめくくと泣きければ、弟も小賢しく顔を

年ばへ

合せて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上臈たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。疾くく入らせ給へ」と恐しげに言ひければ、二人の者は門外へ逃出て、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互に袖をぞぬらしける。ある時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは「我等もいつか成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ」と言ひければ、弟もうちうなづきけり。年ば



へには恐しき事かなと人々思ひけり。

——異本會我物語——

(一)小説家。名は千葉哲夫。明治三十八年五月六日歿。享年三十八。

一〇 武藏野

(二)國木田獨歩

(三)埼玉縣秩父郡。

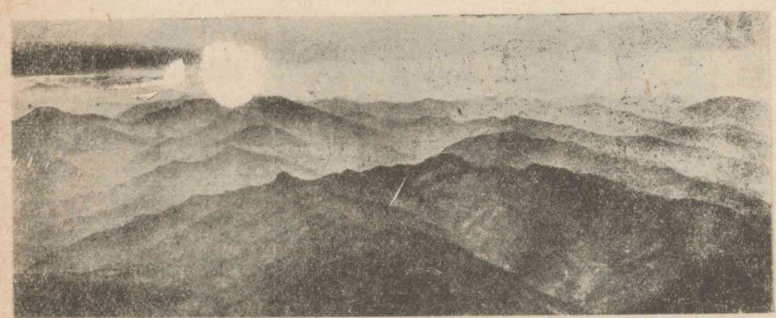


國木田獨歩

昔の武藏野は萱原のはてもない光景で、絶類の美を鳴してゐたやうに言傳へられてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色と言つてもよい。その木は主にならの類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌出る。その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、様々の光景を呈する。その妙は、ちよつと西國や東北地方の者にはわかりかねる。元來日本人は、これまでならの類の落葉林の美を餘り知らなかつた。林と言へば、主に松林のみが日本の文學、美術の上に認められてゐて、歌

(一)ロシヤの小説家。西紀一八八三年。八三。二葉亭四迷。小説家。長谷川辰之助。明治二五年四月十九日歿。享年六十。

氣まぐれな空



秩父連峯

にも、なら林の奥で時雨を聞くといふやうな事は頗る稀である。自分はツルゲーネフの書いた物で、二葉亭が譯したある短篇の冒頭にある左の一節を愛讀する。  
秋九月中旬といふ頃、一日自分がさる樺の林の中に坐してゐた事があつた。朝から小雨が降注ぎ、その晴間にはをり／＼なま暖かい日影も射して、誠に氣まぐれな空合。あははしい白雲が空一面にたなびくかと思ふと、ふとまた、あちこち瞬く間雲切がして、無理に押分けたやうな雲間から、澄んで賢しげに見える人の眼の如く、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧し



て、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽に戦いだすが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは、春先する面白さうな笑ふやうなさゞめきでもなく、夏の緩やかな戦ぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおどろした薄寒さうなお饒舌でもなかつたが、唯漸く聴取れるか聴取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳はつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子が、間斷なく移り變つた。或は其所にありとある物すべてが一時に微笑したやうに、隈なく赤み渡つて、さのみ繁くもない樺の細々とした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散布いた細かな落葉は俄に目に映じて、眩きまでに金色を放ち、頭を搔きむしつたやうなバアポロトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際隈もなくもつれつからみつして、目前に透か

〔わらびの類。〕

もつれ〔繚〕

物のあいろ

して見られた。

或はまた、四邊一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立も、降積つたまゝでまだ日の目に逢はぬ雪のやうに、白く臙に霞む。——と、小雨が忍びやかに怪しげに私語するやうに、ばら／＼と降つて通つた。樺の木の葉は著しく光澤がさめても、流石になほ青かつたが、唯そちこちに立つ稚木のみは、今はすべて赤くも黄色くも色づいて、をり／＼日光が、今雨にぬれたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて來るのを浴びては、きら／＼と煌いた。

自分が落葉林の趣を解するに至つたのには、この微妙な敘景の筆の力が多い。これはロシヤの景で、しかも林は樺の木で、武藏野の林はならの木だから、植物帯から言ふと甚だ異なつてゐるが、落葉林の野である事は同じである。自分は屢、思つた、若し武藏野の林が



諦視する

ならの類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な變化に乏しい色彩の一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。ならの類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞つて、小鳥の群のやうに遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す」と書いた。ツルゲーネフも坐して、四顧して、そして耳を傾けた」と書いてゐるが、この耳を傾けて聴くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心になつてゐるだらう。秋ならば林の中から起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戦ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にす

だみ聲

だく蟲の音。空車、荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散す音。これは騎兵演習の斥候か、さもなくば夫婦連で遠乗に出掛けた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それもいつしか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに路を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。

大様な趣

時雨の音に至つては、これ程幽寂なものはない。昔から和歌の題にまでなつてゐる。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、いかにも靜かで、また大様な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て、北海道の森林で時雨に遭つた事がある。これはまた人跡絶無の大森林であるから、その趣は更に深かつたが、そのかはり、武藏野の時雨の人懐かしくさゝやくやうな趣はなかつた。



(一) 東京市中野區  
(二) 東京市澁谷區  
(三) 東京市世田谷區  
(四) 東京府北多摩郡。櫻の名所。

秋の中頃から冬の初試に、中野あたり、或は澁谷、世田谷、または小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足を休めてみよ。これ等の物音の忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉が風なしに落ちて微な音を立て、やがてそれも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るのを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな木枯が凄じく林を渡る音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くにさそふ。自分はこのもの凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ



野 藏 武 の 枯 冬

星斗闌干

(一) 幕末の國學者  
周防國岩國の  
人。文久二年  
(二) 五十二  
歿、年八十一。

續けた事もある。熊谷直好の歌に、  
夜もすがら木の葉片よる音きけば  
しのびに風のかよふなりけり  
といふのがある。自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。  
林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感ずるのは、春の末から夏の初で、その次は黄葉の季節である。半ば黄色く、半ば緑な林の中を歩いてゐると、澄渡つた大空が梢々の隙間からのぞかれて、日の光は風に動く葉末々に碎け、その面白さは言盡されぬ。日光とか碓氷とかいふ天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つのも、特異の美觀ではあるまいか。

— 武藏野 —



(一) 評論家。明治四十九年(一八八六年)千葉縣に生れた。

一 今昔さまぐ

石井 滿

今と昔とでは、社會の各方面に大變な相違がある。舊幕時代には、加賀の米に就いて「大阪の人は、加州米と言へば殊の外悪い米で、口に入れ、ばぐしやくして、一向膏のない米であると思つてゐる。然るにその産地の加賀に来て見れば、加賀は天下第一の肥沃の地で、米も上等である。大阪の人が加州米は悪いと思つてゐるのは、加州藩にむづかしい規則があつて、なか／＼土地の米を外へ出さず、僅かに悪い米を大阪へ出すからだ」と言はれたものである。これは、農民が自分の食べる物を自分で作るといふ、自給自足の生活をしてゐたばかりでなく、一つの藩もまた、その領分内で自給自足の經濟を立てゝゐた結果である。

今日の有様はこれと全く違つてゐる。私の郷里(一)の房總の海岸に

自給自足

(一) 千葉縣(上總國)君津郡湊町。

移出する  
まぐる鮪

行つて見ても、よい魚は大概東京や横濱へ移出されてしまつて、土地には餘り残らない。即ち房州のまぐるを、房州人はその土地で食べられないといふ有様である。旅先から北海道や青森の林檎、山形や福島(一)の櫻桃などを東京へ送る人がよく、その土地の名物を買つて送るのであるから、値段が安くといふ、贈物であると思はれては困る。この頃は、名産の出る地方に来て、小賣値段は必ずしも東京より安いとは言はれない。それだから、こちらの好意を贈るといふ意味に解してもらはなければ、せつかく手數を掛けて送つても、何にもならない」と言ふ。彼と此、誠に面白い對照ではないか。

加州藩がしたやうに、禁令を作つて領内の産物を他の地方へ積出す事を制限した時代が過ぎて、その土地の産物を多く他の地方へ賣出すやうになつた後でも、荷物を運送する設備が十分に發達してゐない爲に、日本内地に於てすら、なか／＼不自由な事が少く



なかつた。

沖の暗いのに白帆が見える

あれは紀國蜜柑船

といふ俗諺を見るがい。

元來、紀州は蜜柑の本場である。或年の事、この國では蜜柑の出來が殊に良かつた。冬になると、大きな樽に入れた蜜柑は到る所山程積まれてあつて、値段と言へば殆ど捨値も同様であつた。それに引替へて、江戸では海上の暴風の爲に、何所からも蜜柑が入つて來ない。それが爲に、年中行事の鍛冶屋のふいご祭が出来ない。それを見て取つた紀國屋文左衛門といふ男が、決死隊ともいふべき船頭たちを一艘の船に乗込ませ、捨値も同様の蜜柑を江戸まで運んで來た。思懸ないこの蜜柑の入荷に、八百八町の鍛冶屋さんたちは非常に喜んだ。負けぬ氣の江戸つ兒の常として、先を争つてその蜜柑を

ふいご(櫛)  
江戸時代の豪商五十嵐氏、紀伊の人。享年三十九年(一八六四年)歿、享年六十六。

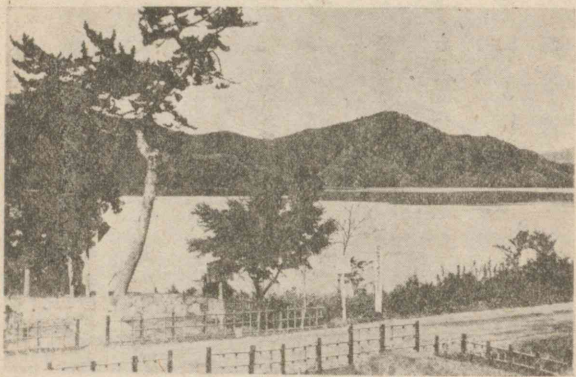
入荷

買つたので、文左衛門は莫大な利得を獲た。まるで夢のやうな話で

はないか。

かの明暦の大火の後には、江戸では材木が不足して非常に困つたので、利に敏感い商人中には、逸速く木曾まで買占に行つた者さへあつたが、大正の大震災火災の後には、東京は却つて材木が有餘つて困つたやうな次第であつた。

明治初年の東北の飢饉に死んだ人は随分多かつたが、大正の大震災火災の時には、玄米飯をたべるのも三四日で濟んで、やがて各方面から食料品が速に供給された。その救恤品は獨り日本内地からばかりではなく、遠い外國からも可なり敏速に送られ



箱根の關址

(一)明暦三年(一七二七年)正月三十一日、江戸に起つた大火事ともいふ。

救恤



記憶に新た

(一) 神奈川縣(相模國)の川。富士東麓山中湖に發し、桂川、相模川となり、相模灣に注ぐ。  
(二) 山梨縣の笛吹川が合流して、南に注ぐ。駿河國の北境、安倍町の西を過ぎて駿河灣に入る。  
(三) 静岡縣(同國)庵原郡の川。興津の西で駿河灣に注ぐ。

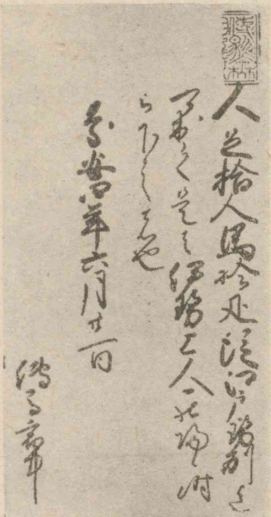
た事は、まだ私どもの記憶に新たなところである。人の移動といふ方面に就いて見ても、遠い昔は姑く措いて、徳川時代の交通は、非常に面倒な事になつてゐた。その理由も色々あり、第一には、戦争の都合からでもあつたらうが、各街道に關所を設け、旅人が其所を通過するには必ず手形を要し、忍んで關所を通過する者は重追放に處せられ、脇路を越した者は直ちに磔刑に處せられた。また東海道の諸川中、馬入、富士、安倍、興津、大井などの川々には、故らに橋を架せず、舟も置かなかつたので、旅客は川越の人夫の肩か輦臺に乗つて渡る外はなかつた。一たび大雨が降つて川水が増すと、忽ち川止となつて行旅は停滯し、その混雜と迷惑とには、實に名狀し難いものがあり、江戸三百年の間、茲に演ぜられた悲劇も、随分多かつたやうである。

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井川

といふ俗諺がよく當時の状態を説明してゐる。

が、その箱根の關所も、またなか／＼厄介なものであつた。箱根の關所は、諸大名の證人として江戸に置いてある妻子が國元へ脱出



するのを防ぐ事に力を注いだ。隨つてその取締は頗る嚴重であつて、通行の際は一々手形などを調べたものである。

徳川幕府の初期に於ける我

が國の交通の幹線は、東海道、中仙道、日光街道、奥州街道、甲州街道の五つの外、中國、山陰、南海、その他の交通路であつた。これに、それ／＼驛、宿場があつた。當時東海道の於ては、各驛の人夫百人、馬百匹、中仙道は五十人、五十匹を常に備へて置かせ、それでも足りない時には、

人足拾人馬  
拾疋江戸よ  
り勢州まで  
出すべく候  
人は伊勢上  
候時下され  
候者也  
慶安四年六  
月廿一日  
傳馬宿中



(一) 第百七代後陽成天皇の御代(二二六四年)

驛の近隣の諸村から助を借りた。これが驛傳の制度で、「宿次傳馬」と言つたが、この常備の人夫や驛馬による運送には、無賃のと、さうでないの(これは規定賃錢と相對賃錢とに分たれる)とあつた。無賃で運んだのはお上の御用の物で、幕府の朱印證文を有する物に限るとされてゐた。しかし、お上の物でも賃錢を支拂つたのもある。その外の品物を運送してもらふのに、定賃か相對賃錢かを支拂つたのは言ふまでもない事で、家康が幕府を江戸に開いた翌年の慶長九年に、既に官道の賃錢を一里十六文とし、私道では適當な増賃を取らせた。

この規定賃錢は、その時々々の物價の高低に應ずる爲に屢、變更された。またその需要が多いので、増賃錢を請求するやうな良からぬ者もあつた。それで、不當な賃錢の請求を禁じ、犯す者は嚴罰に處するやう、幕府から令した事もあつた。

(二) 第六十代醍醐天皇(一五五〇年)の延喜式(一〇八六年)に藤原朝平(一〇八六年)に詔し、儀を撰ばしめられたもの。

昔の旅がいかに困難であつたかといふ事は、<sup>(一)</sup>「かはい兒には旅をさせよ」とか、「旅は道連、世は情」とかいふ言葉でもわかる。  
延喜式によれば、相模國から京都まで上り二十五日、下り十三日、武藏國から京都まで上り二十九日、下り十五日とある。當時の標準速力は、馬が一日凡そ十一里、歩行は八里餘であつた。かの能因法師の

都をば霞とともに立ちしかど

あきかぜぞふく白河のせき

といふ歌にもある通り、春霞都門を出て、秋風白河に入ると言つたやうな譯で、當時の人には、日本六十餘州は可なり廣大な土地のやうに思はれた事であらう。況や親の敵討などで、あてどもなく唯一人の仇の行方をぶら／＼と捜し廻るのは、全く氣の長い事であつた。それ故芭蕉の「奥の細道」のやうな文章も、また十返舎一九の「東海

(三) 江戸時代の小説家。本名は江重貞一。一八二四年(一八七九年)歿。代表作は「浮城物語」。



道中膝栗毛のやうな文學も、旅から得られた譯である。

昔の街道と言へば、松並木が連なつて、掛茶屋がちらほらしてゐ

た。其所に毛槍挾箱、大名の行列が通る。馬の鈴を鳴して驛傳の者が行く。伊勢參宮や京上りの商人が往來する。まるで繪巻物に見るやうな優長千萬なものがあつた。



また他郷から故郷へ便りをするのは、大變な事であつたに相違ない。それは飛脚によつて行はれた。飛脚業の最初は、手紙を運ぶ事が主な仕事であつたが、次第に發達して、金錢も取扱ふやうになつた。

その飛脚の出る回数も、初は三度飛脚と言つて、江戸、京都、大阪の間

〔櫻町天皇の御年代〕  
二四〇〇三  
年一四〇三

移動ホテル

俯瞰する

〔木曾川のこと。〕

を月に三度往來したものだ。それが次第に増加して、寛保元年頃には、月に三十回以上も出るやうになつた。しかしその速度は、大阪、江戸の間を五六日間要したやうである。

それが今ではどうであらう。京都から更に四十三キロメートル餘りの彼方なる大阪へと、東京驛頭を發する汽車には、快走僅かに八時間で到り得る超特急列車さへあつて、車内の設備や乗客の待遇などに就いても、眞に移動ホテルの觀がある。蓋し現今に於て、最も快適で、また最も安全な旅は、これを推して第一とすべきであらう。

しかし、いはゆるスピード時代にふさはしい物は、何よりも飛行機でなければならぬ。かの旅客機は、氣象の上に障礙を見ない限りは、日々定時にこゝらの空を飛んで、昔の海道筋を俯瞰しながら、箱根山、大井川の險難を物ともせず、木曾の長江に一縷の銀線を喜



び、鈴鹿の白雲に高く翔れば、東京、大阪間は凡そ二時間餘を費すに過ぎない。  
若し道路が到る所完全になれば、自動車の旅も、昔の五十三次を二日で走り得て、現代的慰樂を人々に與へるに十分であらう。それにしても、移り變つた世情ではないか。

— 鐵道讀本 —

自製

自製の英雄たれ

津村 秀松

人間は誰しも、その志す所に成功する事を希望せぬ者はない。しかし、この頃の世の中は、成功どころか、一通りの生活をする事すらなかく、容易でない。然るに今の青年の中には、その志すところに樂々と成功する事を念とするかに見える者が決して少くない。

(一)實業家、法學博士。昭和十四年、昭兵年六十四歳、昭和十縣

第一人者  
最もすぐれた  
者。  
氣魄  
氣力。氣象。

一體今の世の中で、樂々と成功しよう、無難に出世しようなどといふ考程間違つた考はない。日本の事だけで考へてみても、本國だけで同胞既に六千九百萬、大日本になると人口無慮九千萬以上だ。このやうに數多い同胞兄弟のうちから、誰彼と人に言はれる程の人物になる事は、一通りの苦勞や努力で到底出來ようはずがない。人並の努力では、結局、人並の人間になるより外はない。常人の爲す能はざる所を爲してこそ、始めて常人以上になり得るのだ。將來世の中に頭を出さうと切々勉強してゐる學生だけでなく、何百萬人とある。これが皆お互にお互の競争者だ。世界全體の上では、その數は更に數十倍するであらう。これだけの大敵を前後左右に控へて、その志す方面の第一人者と成らうといふには、通常人の不可能とする事を可能とするくらゐの氣魄と努力とがなくてはならぬ。學資があつて學問する。父兄があつて他郷に遊學する。氣候の良い所で仕事をす。便利な所で商賣をす



敢行する  
おしきつて行  
教鞭を取る  
學生を教授す

る。……こんな事は誰にでも出来る事だ。誰にでも出来る事をしただけでは、普通の結果しか得られないのは當然ではないか。普通の事以上の事を敢行してこそ、始めて人並以上の成功を期待する資格が生ずるので。

今から十數年も前の事、私が今の神戸商業大學に教鞭を取つてゐた時、毎年の卒業式に當つて、よく次のやうな事を述べては、告別の辭に代へた。

今日は誠にめでたい卒業式であるが、諸君に對する學校の卒業式は、實は諸君に取つての社會の始業式なのだ。學校はこれまで諸君に對して、唯一通り豫備知識を與へたに過ぎぬ。書物の上の學問なり勉強なりでも、今日を以て終りを告げたのだと思つては大きな間違だ。社會へ出てからもなほ引續いて書物を讀み、勉強をせねば、せつかく學校が與へた豫備知識が何にもならぬ。學生時代と違つて、勤人つとじんとなれば、恐らく暇がなからう。

それでも朝は人並より早く起き、夜は人の寝る時間を盗んで、せめて自分が勤めてゐる所の會社なり銀行なりに關する書物や専門の雜誌だけでも、必ず目を通すといふ心懸がなくてはならぬ。……

と。ところが、その頃の卒業生が今も時々遊びに来るが、雑談の間に、卒業當時の事を思ひ出しては、よくこんな事をいふ、

私どもが卒業する時に、先生の御教訓もありましたが、さて會社、銀行に勤めてみますと、激しい一日の働ですつかり疲れ切つてしまつて、とても書物や雜誌を讀むなどといふ時間も根氣ありません。

それに對して私は常にかう答へてゐる、

それはその通りに相違ない。恐らく會社や銀行の仕事は、君等に朝早く、夜晩く讀書し研究する餘裕と勇氣とを殘させまい。だから、自分の言つた事は確かに無理なのだ。人並では出来ぬ



事なのだ。しかし、人並に出来る事をするだけなら、人並の出世で我慢する外はないではないか。人間の出来る事、せよとは言はぬが、人間の出来る最大限度までの努力を盡さねば、人間最大の出世が出来ぬ道理ではないか。



フランクリン

私が曾て學窓にゐた頃、教科書としてフランクリンの「自叙傳」を読んだ。これは徹頭徹尾、偽らざる告白である。世の中に「偽らざる告白」を書き得る人が、果して幾人あらうか。私は先づこの事に感服した。次には「偽らざる告白」即ち眞の自叙傳を書き得る人があるにしても、これ程立派な「人間努力」の内容を整へ得る人が、果して幾人あらうかといふ事に感服した。そしてこの二つの感服が、今もなほ私の心にしつかと銘せられてゐる。  
小學校も卒へず、中學校にも入らず、正式の教育は何一つ受け

(一)アメリカ合衆國の政治家、外交家、西紀一七〇六年一七九〇年

徹頭徹尾

始から終まで一貫すること

銘せられる  
ささみこまれ

植字  
活字を組んで版にすること

(一)ドイツの政治家、鐵血宰相の名がある。西紀一八一五年一八一九年  
(二)アメリカ合衆國の獨立の元勳。初代の大統領。西紀一七三九年一七九九年  
(三)アメリカ合衆國第十代の大統領。西紀一八〇九年一八六五年

得なかつた一移民の貧兒が、開墾日なほ淺いアメリカで印刷屋の小僧になり、植字手傳の傍ら、夜を日に繼いで勉強した事が土臺になつて、一代の大政治家となつて副大統領になり、殊に一大科學者となり、一大發明家とまでなつたフランクリンは、全く自製の英雄であり、徹頭徹尾、自力獨學の大學者である。私は、ナポレオンにも、ビスマルクにも餘り感心せぬ。ワシントンなどに至つては尙更の事だ。それでゐて、古今東西の英雄豪傑のうちで、リンカーンと並べてこのフランクリンを最も強く崇拜するのは、それが時運といふ手傳や、天才といふ素質はさう多分になくとも、勉強と努力と修養次第で、必ず人間の到達し得る範圍の英雄豪傑になり得る事を、身を以て示したからである。

——新興日本大熱辯集——



一二 冬の山里

木の葉ちる宿はき、わくことぞなき

時雨する夜も時雨せぬ夜も

さびしさに煙をだにも絶たじとて

柴をりくぶる冬のやま里

源 頼 實

和 泉 式 部



蹟筆月蓮垣田太

冬畑の大根の莖にしもさえて

あさとてさむし岡ざきの里

神無月ふりみふらずみ定めなき

しぐれぞ冬のはじめなりける

太田垣蓮月

よみ人知らず

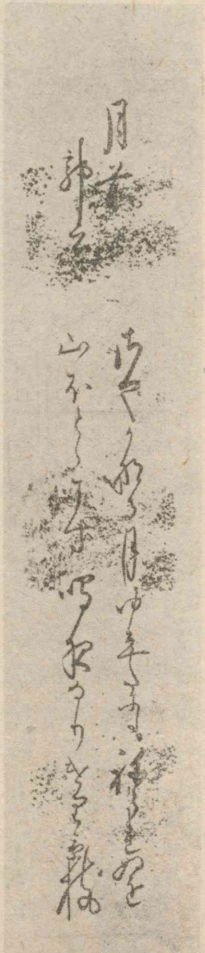
(一)鎌倉時代初期の歌人。  
(二)平安時代の歌人。越前守大江雅致の女。  
山さとはまの聲のみ  
つななれて  
きふかぬ  
かせふかぬ  
日はさひしかりけり  
蓮月  
(三)京都市左京區岡崎  
(四)幕末の尼僧、歌人。俗名、京都に住んだ。明治八年(一八七五)寂。

月前郭公  
さやかなる  
月ゆゑたに  
もねられたぬ  
を山ほととぎす  
鳴夜な  
りけり  
景 樹

てる月の影の散りくるこゝちして

よる行く袖にたまる雪かな

香 川 景 樹



蹟筆樹景川香

こまとめて袖うちはらふ蔭もなし

佐野のわたりの雪のゆふぐれ

きのふといひけふと暮して飛鳥川

ながれて早き月日なりけり

藤 原 定 家

春 道 列 樹



(一)吉野朝の忠臣  
正平九年(一四一〇年)歿  
年六十三  
(二)延元元年(一九〇九年)五月  
九日歿  
(三)足利尊氏  
平一三年(一三三〇年)歿  
年五十四

(四)第九十六代後醍醐天皇  
(五)恆良親王  
醍醐天皇の御孫  
三年(一三三三年)御  
年十五  
(六)藤原實世  
正平三年(一三三二年)歿  
年五十一  
(七)新田義貞  
延元三年(一三三三年)歿  
年三十八

一三 吉野の行宮

北畠親房

(一)五月にもなりぬ。高氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸り參る程に、同二十七日また山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたび／＼合戦ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末を思し召す途ありしにこそ。東宮は北國へ行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめ、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。

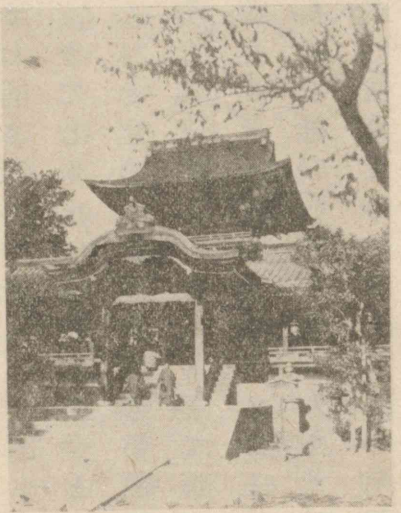
同十二月に忍びて都を出でましまして、河内國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふもとの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせ給ひ、神

奇特の事

(一)源顯家。北畠親房の子。延元二年(一三三二年)戦死。  
(二)義良親王。後醍醐天皇の御孫。

(三)今大阪府泉北郡堺市の南  
時や到らざりけん  
(四)「もろとも」  
昔の下には朽  
あずしてうづ  
もれぬ名を見  
るぞ悲しき  
(金葉集、和泉式部)

璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特の事にこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起すやからもありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。



またの年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、重ねてうち上りぬ。海道國々を悉く平けて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより所所の合戦數多たび、互に勝負ありしに、同五月和泉國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけん。忠孝の道此所にて極りにき。昔の下にもうづもれぬ物とては、唯徒をのみぞ留めし。心うき世にもありしか。官軍なほ心を勵ま



(一)京都府殺喜郡の西北にあつて、その山上に石清水八幡宮がある。

言ふばかりなし

(二)源顯信。正平年中戦死。

節度

儒の君

して男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國なる義貞も、たび々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。  
さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。(三)左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末、方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし。九月の初め纜を解かれしに、十日

おどろくし

(一)伊豆半島の最南端の一角。一名石廊岬。

(二)愛知縣(尾張國)知多郡の篠島。

(三)霞ヶ浦。

めづらか

餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろくしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いと々波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなりにけるに、皇子の御船のみは障なく伊勢(二)の海に著かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸國なる内(三)の海に來著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船同じ風にて東西へ吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかゞと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野に入らせましたし、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いと々思ひ合せられて、尊くもありしか。な。また常陸はもとより心ざす方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州(四)の守も次の春重ねて下向して、各國に就きにき。

(四)左中将道世。



〔一〕「ぬるがうちに見るをのみを夢といはんはかなき世をもうつ」とは見ず〔古今集〕壬生忠岑

〔二〕藤原經忠。正平七年〔二〇一二年〕夏、年五十一

〔三〕第十四代。

〔四〕第十五代應神天皇。

宸襟

〔五〕後村上天皇。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。ぬるがうちなる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かずく、目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへ滞りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば、仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す。

昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましま

しぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。なか／＼かくて静まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。——神皇正統記——

一四 最後の參内

さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢などを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、尪弱の身を以て大敵の威を碎

〔一〕正平二年〔二〇〇七年〕八月の河内國〔大阪府〕藤井寺の合戦、同じく十一月の攝津國〔大阪府〕住吉阿倍野の合戦。  
〔二〕足利勢。  
〔三〕足利尊氏。  
〔四〕師直の子。  
〔五〕師直の弟。  
〔六〕山城國久世郡にある。今の京都府淀町。  
〔七〕同國綴喜郡八幡町。今の京都府八幡町。  
〔八〕藤原氏。男山で戦死した。尪弱



〔第九十六代後醍醐天皇〕

き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはて河内に歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け參らせよ。』と申し置きて死して候。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。このたび我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言にたがひ、且は武略のいひがひなき、謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、このたび師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二つのうちに戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の

雌雄を決す

有待の身

傳奏

〔第九十七代後村上天皇〕

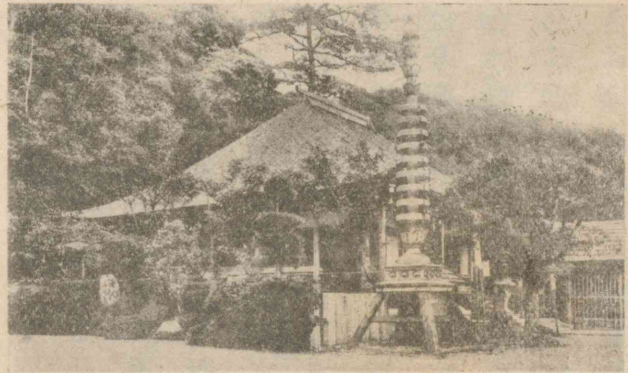
龍顔を拜し奉らん爲に參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞぬらされける。  
主上乃ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする。ところなれば、今度の合戦手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。』と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、唯これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

とかくの敕答に及ばず



〔大和國（奈良縣）吉野郡吉野山如意輪寺（淨土宗）の内にある。〕

逆修



正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一

足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥に、

如意輪堂

かへらじとかねて思へば梓弓なき數に、いる名をぞ留むる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と思しくて、各鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。

— 太平記 —

如意輪堂 伊藤龍涯筆





(一) 歴史家。元臨  
時帝室編修局  
編纂員。明治  
二十七年(二五  
三)長岡市  
に生れた。

身を鋒鏑に暴  
す

(二) 第十代。  
(三) 北國は大彦命、  
東海は武甕槌命、  
別命、西海は  
吉備津彦命、  
丹波は丹波道  
主命。

一五 國難と皇室

一國の危急存亡や、國民の榮辱死生に關した國難に際し、御歴代  
の天皇が全く御身を以て解決の衝に當らせられた烈々たる御精



(筆邦雅本橋) 皇天武神

神と御功績とは、國民の  
何人も感動せずには  
られないところである。  
神武天皇の御東征の  
時には、天皇は御身を鋒  
鏑にお暴しになり、皇兄

五瀬命は長髓彦との戦にお傷はしくも戦死なされた。崇神天皇が  
天業經綸の大志を懷いて、大規模の邊土拓殖を行はせられようと  
して、いはゆる四道將軍を四方に派遣なされた時選ばれた四人の  
將軍は、何れも天皇の御叔父や御甥などの皇族であらせられた。次

(一) 渡邊幾治郎



いで日本武尊は十六歳の少年で、女装して熊襲の本陣に侵入して、その巨魁を誅せられたが、後更に東國を征して、陣中に薨ぜられた。神功皇后は女性の御身を以て、海を航して遙かに新羅を征伐あそばされた。その時皇后は群臣に告げて、「征伐は國の大事である。若しこれを汝等に任せて、事が敗れる時は罪は汝等に歸する。これは誠に傷むべき事である。私は女であるから、男装して征伐に従はう。若し事が成就すれば汝等と功を共にし、敗れたら獨り罪を受けよう」と仰せられたので、群臣は大いに感激したといふ。神功皇后の外征は、かゝる尊い御精神を以て行はれたのである。

上古、天下に事があれば天皇の親征し給ふを常とし、然らざれば皇子か皇后がこれに代られるのが例であつた。政權が武門に移つても、その御精神には變化がない。故に龜山<sup>(一)</sup>上皇は元寇の難に際し、征伐は武士にお任せになつたが、御身を以て國難に代らうと、大神

(一)第九十代。

宮に祈らせられた。

世の爲に身をば惜しまぬ心とも  
あらぶる神は照しみるらん



龜山天皇(高橋廣湖筆)

とは、この烈々たる御壯心を歌はせられた。御製である。後醍醐天皇が北條氏を滅して建武中興の世を開き、次いで足利尊氏に苦しめられ給うた時、天皇と終始艱苦を共にせられたのは、護良親王以下の皇子方であつた。そして護良親王は鎌倉に弑せられ給ひ、天皇は北闕を望んで吉野に崩御あそばされた。宗良親王もまた諸國に轉戦して、朝家の爲に盡させられたが、



末造

君のため世のため何か惜しからん  
すて、かひある命なりせば  
と、凛々たる犠牲的精神を示された。

江戸幕府の末造、外艦が渡來して開港を迫り、天下紛々として定まらなかつた際、孝明天皇は深く宸襟を惱ませられ、幾度か御寢食を減じて神に祈らせられた。宸慮の深かつた事は、實に想像の外である。天皇の御製に

すまし得ぬ水に我が身は沈むとも

にごしはせじな四方のたみ草

とあるのは、實に有難い大御心である。明治天皇は御在位四十六年、一日の如く政治に御精勵あそばされた。日清戦争には大本營を廣島に進め、九箇月の間いと狭き御室に起臥せられて、軍務に御盡瘁あらせられた。侍臣が備へ附けようとした長椅子やストロープをす

國民と休戚を分つ



(筆造黨南) 皇天治明るけに營本大島廣

ら、陣中にはないからと仰せられて、用ひさせられなかつた。その兵士と艱苦を共にし、國民と休戚を分たせ給うた偉大な犠牲の御精神は、古名將、聖主と雖も、及ばないところである。

かくの如く、國難に遭つては天皇、若しくは皇后、皇子が御身を以てこれに當り、國家を率ゐさせられた事は、古今に互つて變らぬ我が皇室の御本領である。さうしてこれによつて、我が國はいつも國難を脱して、今日の

の進歩發展を遂げる事を得たのである。  
明治天皇の御製に







然るに世の青年の中には、往々秦の始皇にも劣らぬ無理な注文をする者がある。自分が勉強せずして立身出世を望んでみたり、或は自分が努力せずに、郷里の先輩の引立によつて、一足飛に好位置を得る事を考へたりする。かくの如き事を夢みる者は、恰も權力も智力もない始皇の模造品が、立身出世の仙薬を需めるやうなもので、實に憫むべき話である。世の中には、一等の富籤を當てゝみたいと、夢のやうな事を考へてゐる人もあるが、かやうな都合の好い注文をつける人を、西洋の諺では、燒鳥が口の中に飛んで來るのを待つ人とか、または雲雀を捕へようとして天の落ちるのを待つ人とか言つてゐる。

故に私は茲に青年に告げたい。諸君等の立身出世には、何等の妙法がない。唯自ら助くるあるのみである。自ら勉強し自ら努力して、自己の運命を開拓する外に、出世の妙薬はないのである。立身には

妙法なし。先づこの一語を信ずる事が、立身の第一歩であつて、そしてまた立身の最後の秘訣である。

古人も凡そ事の成るは、成るの時に成るにあらずして、必ず由つて來るあり」と説いてゐるが、西洋では、神様の辭書には偶然といふ文字なし」と言つてゐる。何事をも知つてをられる神様の眼には、別に偶然とか不思議とかいふ事はない。すべて當然の原因のある所に、當然の結果が生じてゐるのみである。よく怠惰な學生が、平素勉強もせず、にゐながら、試験間際に徹夜の勉強をしたり、または巧に試験問題を推測して、僅かの勉強で奇功を奏する事を考へたりする。世間にもまた往々、平素注意さへすれば、何事もなく濟むべき事をうち棄てゝ置いて、事件が発生すると俄に狼狽し、刀の刃を渡るやうな藝當を演じて巧に危険を免れ、得意顔をしてゐる者が多い。この種の巧妙は、實に愚かな巧妙である。青年の學ぶべき事は、この

奇功を奏する

愚かな巧妙



賢い平凡

やうな愚かな巧妙ではなくて、賢い平凡でなくてはならぬ。園基の格言に「名人に妙手なし」といふ事がある。即ち名人は常に正々堂々一手をも忽にしないから、自然の大勢で平々凡々に敵に勝つのである。故に妙手を出して奇功を奏する必要がないのである。



嘗て我が國にペストが流行した。その時ドイツから有名な醫者コッホ博士が來朝した。我が國の朝野の人が擧つてこれを歓迎して、謹んでその教を請うた。博士

は種々研究した結果、教を垂れて曰く、

「ペストを豫防するには、鼠を退治するのが近路である。凡そ生物を退治するには、その生物のうち勝つべき他の生物を蕃殖せしめるにある。故に鼠を退治するのは猫を飼養するにある。」

〔細菌學者。病原バクテリアの研究上の功績多く、結核菌、コレラ菌等を発見した。西一九〇三年〕

〔黒死病。〕

〔徳川氏の世子。直勝の長子。大關ヶ原の陣に大関夏元、石山等淀城に封ぜられた。寛文八年八月二日歿。年八十八〕

〔徳川氏の世子。直政の第二子。大坂冬の陣に根城に封ぜられた。功績あり。享保九年三月十一日歿。年三十一〕

〔徳川氏の世子。直政の第二子。大坂冬の陣に根城に封ぜられた。功績あり。享保九年三月十一日歿。年三十一〕

との事であつた。私は當時地方の警察部長として防疫に従事してゐたので、成程眞理は平凡なものであると、大いに感心した。

これに似た話は昔もある。嘗て江戸時代に、永井信濃守尙政が老中となつた時に、井伊直孝に教を請うた。直孝は容易に教へない。遂に齋戒沐浴七日の後に、烏帽子直垂の大禮服を著用して、謹んで再び教を請うた時に、直孝は端然としてこれに告げて言ふ、「唯油斷大敵の四字を忘るな。尙政もまた深く感謝して退出したといふ。私はこの物語を聞いた時も、また成程眞理は平凡なものであると思つた。

眞理は常にかくの如く平凡なものである。故に若し世の青年が、眞に立身に妙法なしといふ一事を、心肝に銘して奮起するならば、この一事既に諸君を成功に導くに足るのである。先づその依頼心を去れ。決して妙法を求めるな。そして唯平凡な眞理の道を歩め。平



特むところ  
唯我あるのみ

(一) フランスの小  
説家(西紀一  
八〇二年—  
一八七〇年)

凡な眞理の道とは何であるか。唯努力である。我の眞に恃むところ  
は唯我あるのみである。

アレキサンダー・デューマ曰く、



マ - ユ - デ

「我を救ふ者は何所にありや。曰く、爾の側にあり。これを知らずし  
て他に求むれば、これより難き事なし。こ  
れを知りて自ら求むれば、これより易き  
事なし。」

これは面白い言葉である。眞に自己を救  
ふ者は、唯自己あるのみである。この一事を  
いかなる程度にまで深刻に理解するかといふ問題は、やがてその  
人のいかなる程度まで成功するかといふ問題である。若し此所に  
人があつて、自分の頭上に帽子を被つてゐる事を忘却して、頻りに  
部屋や押入を捜し廻つてゐるとしたら、天下これ程滑稽な事はあ

るまい。しかしながら、今日の青年にして、眞に神様の前に立つてこ  
の男を笑ひ得る者が、幾人あるであらうか。自分の力によつて自分  
を救ふ事を考へずして、徒に他人に依頼し、自ら努力せずして、徒に  
僥倖のみを冀ひ、賢い平凡な正道を歩まないで、徒に愚かな巧妙の  
間道を走らうとする者は、すべて自己頭上の帽子を忘れて、これを  
部屋や押入に捜してゐる男と同一である。

天は自ら助くる者を助く。禍福門なし。唯これ人の招くところ。聖  
書に曰く、我を呼びて主よ、と曰ふ者、盡く天國に入るにあらず  
唯これに入る者は、我が天にいます父の旨に遵ふ者のみなり。禮拜  
ばかりでは天國に行けない。神様の旨に遵ふ言行がなくてはなら  
ぬ。「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも神や守らん」といふの  
も同じ教である。自ら努力せずしては、神様にも救つては戴けない。  
況やこの世智辛い世の中に立つて、自己の運命を開拓しようとする

(一) 新約聖書マ  
タイ第七  
章第二  
十一節



する者が、いかにして他人のみに依頼して成功する事が出来ようか。

或人が米國の富豪カーネギーに致富の妙法を聞いた。カーネギーがこれに答へて「富豪となるに最も必要な條件は、貧家に生れる事である。貧乏のどん底に生れて、貧乏の苦痛を骨髓に徹して味はつた者が、腹のどん底から奮起してこそ、始めて富者となり得るのである。生れながらにして銀のさじを口に入れたやうな者が、どうして眞の富豪に成れようか」と言つた。誠にその通りであらう。不撓不屈、堅忍努力の眞の覺悟は、艱難に遭遇して始めて得られるものであらう。王侯の家に生れた釋迦も、山中に入つて難行苦行の修養を積んで、始めて大悟したのである。

嗚呼、立身に妙法なし。眞理は平凡なり。汝を救ふ者は唯汝あるのみである。自己頭上の帽子を忘れて、これを他に捜す者は誰ぞ。

さじ匙

——梅白し——

〔江戸時代の儒者、經濟家。名は菅、豐後の人。寛政元年（一七九九）年、六十七歳歿。〕

訟事

さばく（捌）

一七 毀譽

三浦梅園



三浦梅園

毀譽は人の大節なり。然りと雖も世舉りて譽むるにも必ず察すべし。人舉りて毀るにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀る事に於てをや。例へば、訟事あらんに、兩方梅理ありと思へばこそ互にいひ募りてやまざるなれ。これを奉行のさばかんに、とにかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。また悪しき人なりとも、それに伴ふ人はこれを善しと思へばこそ交はるなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が悪しと思ふをば毀る習なれ。



ば、その毀譽によりてその人の善惡も分ち難し。同じ一杯の酒ながら、上戸は酔ひて面白き物なりと言ひ、下戸は酔ひて苦しき物なりと言ふ。まして人傳などに聞く人の善惡のさは、おぼつかなき事なり。

昔、人ありて、その子を或寺へ遣し置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは、

「我に月代剃れと言ひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうのわきて惡しとていたく叱りぬ。また或時、我がかはやに行きけるを見て、何とてかはやへは行きし。不届なり。向後かはやへ行くべからずと言ひ、その後、朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするが惡しきとて叱りぬ。すべて理不盡の次第、殆ど困却に及びたり。」

と語りけるを親聞きて、「さりとは出家にも似合はざる事なり」とて、

かはや(廁)

理不盡

急ぎ山に登り、右の事どもを詰りけるに、住持聞きて、

「いや、さやうの事にてはなし。常々髪よく剃る故に、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見給へ、かやうに頭へ切りこみ候。」

とて傷を見せ、

「その上、かはやも行くべきかはやへは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ひし故、これ等の事を返すくも戒め諭しつれ。」

と言ひけるに、ぞ、親も理に服して、却つて罪を謝しけるとぞ。

信濃國（まほ）菌原（まほ）といふ所に木あり。遠くより見れば、はうきの形の如し。よりにこれをは、き木といふ。されど近づきて見れば、はうきに似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠きより見聞くと親しく見聞くと、多くはこのは、き木の類なるべし。凡そ人のものを批判す

(一)長野縣下伊那郡小野川の谷あたつてゐた。











騎虎の勢

調停

かゞり(簪)

元(新納武藏守忠)

元(新納忠元の作)

ある例へば、異主義が新たに外國からはいつて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがてお互に、それには道理も無理もある事を解すると、ばからしくなつて、最早争論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騒亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆明(一)といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の獎勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中かゞり火の下で古今集を讀む武將(二)のあるのも、同じく戰國時代に

敵ぞとて何かは人の憎からん

おなじ御國のおなじ身なれば

と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親

西歐諸國がエ  
ルサレム聖地  
を回教徒であ  
るトルコ人か  
ら奪ひ還す爲  
に起した戰役  
六(一)年一七  
〇一(二)年一  
七〇二(三)年  
一七〇三(四)年  
一七〇四(五)年  
一七〇五(六)年  
一七〇六(七)年  
一七〇七(八)年  
一七〇八(九)年  
一七〇九(一〇)年  
一七一〇(一一)年  
一七一一年(一二)年  
一七一二年(一三)年  
一七一三年(一四)年  
一七一四年(一五)年  
一七一五年(一六)年  
一七一六年(一七)年  
一七一七年(一八)年  
一七一八年(一九)年  
一七一九年(二〇)年  
一七二〇年(二一)年  
一七二一年(二二)年  
一七二二年(二三)年  
一七二三年(二四)年  
一七二四年(二五)年  
一七二五年(二六)年  
一七二六年(二七)年  
一七二七年(二八)年  
一七二八年(二九)年  
一七二九年(三〇)年  
一七三〇年(三一)年  
一七三一年(三二)年  
一七三二年(三三)年  
一七三三年(三四)年  
一七三四年(三五)年  
一七三五年(三六)年  
一七三六年(三七)年  
一七三七年(三八)年  
一七三八年(三九)年  
一七三九年(四〇)年  
一七四〇年(四一)年  
一七四一年(四二)年  
一七四二年(四三)年  
一七四三年(四四)年  
一七四四年(四五)年  
一七四五年(四六)年  
一七四六年(四七)年  
一七四七年(四八)年  
一七四八年(四九)年  
一七四九年(五〇)年  
一七五〇年(五一)年  
一七五一年(五二)年  
一七五二年(五三)年  
一七五三年(五四)年  
一七五四年(五五)年  
一七五五年(五六)年  
一七五六年(五七)年  
一七五七年(五八)年  
一七五八年(五九)年  
一七五九年(六〇)年  
一七六〇年(六一)年  
一七六一年(六二)年  
一七六二年(六三)年  
一七六三年(六四)年  
一七六四年(六五)年  
一七六五年(六六)年  
一七六六年(六七)年  
一七六七年(六八)年  
一七六八年(六九)年  
一七六九年(七〇)年  
一七七〇年(七一)年  
一七七一年(七二)年  
一七七二年(七三)年  
一七七三年(七四)年  
一七七四年(七五)年  
一七七五年(七六)年  
一七七六年(七七)年  
一七七七年(七八)年  
一七七八年(七九)年  
一七七九年(八〇)年  
一七八〇年(八一)年  
一七八一年(八二)年  
一七八二年(八三)年  
一七八三年(八四)年  
一七八四年(八五)年  
一七八五年(八六)年  
一七八六年(八七)年  
一七八七年(八八)年  
一七八八年(八九)年  
一七八九年(九〇)年  
一七九〇年(九一)年  
一七九一年(九二)年  
一七九二年(九三)年  
一七九三年(九四)年  
一七九四年(九五)年  
一七九五年(九六)年  
一七九六年(九七)年  
一七九七年(九八)年  
一七九八年(九九)年  
一七九九年(一〇〇)年  
一八〇〇年(一〇一)年  
一八〇一年(一〇二)年  
一八〇二年(一〇三)年  
一八〇三年(一〇四)年  
一八〇四年(一〇五)年  
一八〇五年(一〇六)年  
一八〇六年(一〇七)年  
一八〇七年(一〇八)年  
一八〇八年(一〇九)年  
一八〇九年(一一〇)年  
一八一〇年(一一一)年  
一八一一年(一一二)年  
一八一二年(一一三)年  
一八一三年(一一四)年  
一八一四年(一一五)年  
一八一五年(一一六)年  
一八一六年(一一七)年  
一八一七年(一一八)年  
一八一八年(一一九)年  
一八一九年(一二〇)年  
一八二〇年(一二一)年  
一八二一年(一二二)年  
一八二二年(一二三)年  
一八二三年(一二四)年  
一八二四年(一二五)年  
一八二五年(一二六)年  
一八二六年(一二七)年  
一八二七年(一二八)年  
一八二八年(一二九)年  
一八二九年(一三〇)年  
一八三〇年(一三一)年  
一八三一年(一三二)年  
一八三二年(一三三)年  
一八三三年(一三四)年  
一八三四年(一三五)年  
一八三五年(一三六)年  
一八三六年(一三七)年  
一八三七年(一三八)年  
一八三八年(一三九)年  
一八三九年(一四〇)年  
一八四〇年(一四一)年  
一八四一年(一四二)年  
一八四二年(一四三)年  
一八四三年(一四四)年  
一八四四年(一四五)年  
一八四五年(一四六)年  
一八四六年(一四七)年  
一八四七年(一四八)年  
一八四八年(一四九)年  
一八四九年(一五〇)年  
一八五〇年(一五一)年  
一八五一年(一五二)年  
一八五二年(一五三)年  
一八五三年(一五四)年  
一八五四年(一五五)年  
一八五五年(一五六)年  
一八五六年(一五七)年  
一八五七年(一五八)年  
一八五八年(一五九)年  
一八五九年(一六〇)年  
一八六〇年(一六一)年  
一八六一年(一六二)年  
一八六二年(一六三)年  
一八六三年(一六四)年  
一八六四年(一六五)年  
一八六五年(一六六)年  
一八六六年(一六七)年  
一八六七年(一六八)年  
一八六八年(一六九)年  
一八六九年(一七〇)年  
一八七〇年(一七一)年  
一八七一年(一七二)年  
一八七二年(一七三)年  
一八七三年(一七四)年  
一八七四年(一七五)年  
一八七五年(一七六)年  
一八七六年(一七七)年  
一八七七年(一七八)年  
一八七八年(一七九)年  
一八七九年(一八〇)年  
一八八〇年(一八一)年  
一八八一年(一八二)年  
一八八二年(一八三)年  
一八八三年(一八四)年  
一八八四年(一八五)年  
一八八五年(一八六)年  
一八八六年(一八七)年  
一八八七年(一八八)年  
一八八八年(一八九)年  
一八八九年(一九〇)年  
一八九〇年(一九一)年  
一八九一年(一九二)年  
一八九二年(一九三)年  
一八九三年(一九四)年  
一八九四年(一九五)年  
一八九五年(一九六)年  
一八九六年(一九七)年  
一八九七年(一九八)年  
一八九八年(一九九)年  
一八九九年(二〇〇)年  
一九〇〇年(二〇一)年  
一九〇一年(二〇二)年  
一九〇二年(二〇三)年  
一九〇三年(二〇四)年  
一九〇四年(二〇五)年  
一九〇五年(二〇六)年  
一九〇六年(二〇七)年  
一九〇七年(二〇八)年  
一九〇八年(二〇九)年  
一九〇九年(二一〇)年  
一九一〇年(二一一)年  
一九一一年(二一二)年  
一九一二年(二一三)年  
一九一三年(二一四)年  
一九一四年(二一五)年  
一九一五年(二一六)年  
一九一六年(二一七)年  
一九一七年(二一八)年  
一九一八年(二一九)年  
一九一九年(二二〇)年  
一九二〇年(二二一)年  
一九二一年(二二二)年  
一九二二年(二二三)年  
一九二三年(二二四)年  
一九二四年(二二五)年  
一九二五年(二二六)年  
一九二六年(二二七)年  
一九二七年(二二八)年  
一九二八年(二二九)年  
一九二九年(二三〇)年  
一九三〇年(二三一)年  
一九三一年(二三二)年  
一九三二年(二三三)年  
一九三三年(二三四)年  
一九三四年(二三五)年  
一九三五年(二三六)年  
一九三六年(二三七)年  
一九三七年(二三八)年  
一九三八年(二三九)年  
一九三九年(二四〇)年  
一九四〇年(二四一)年  
一九四一年(二四二)年  
一九四二年(二四三)年  
一九四三年(二四四)年  
一九四四年(二四五)年  
一九四五年(二四六)年  
一九四六年(二四七)年  
一九四七年(二四八)年  
一九四八年(二四九)年  
一九四九年(二五〇)年  
一九五〇年(二五一)年  
一九五一年(二五二)年  
一九五二年(二五三)年  
一九五三年(二五四)年  
一九五四年(二五五)年  
一九五五年(二五六)年  
一九五六年(二五七)年  
一九五七年(二五八)年  
一九五八年(二五九)年  
一九五九年(二六〇)年  
一九六〇年(二六一)年  
一九六一年(二六二)年  
一九六二年(二六三)年  
一九六三年(二六四)年  
一九六四年(二六五)年  
一九六五年(二六六)年  
一九六六年(二六七)年  
一九六七年(二六八)年  
一九六八年(二六九)年  
一九六九年(二七〇)年  
一九七〇年(二七一)年  
一九七一年(二七二)年  
一九七二年(二七三)年  
一九七三年(二七四)年  
一九七四年(二七五)年  
一九七五年(二七六)年  
一九七六年(二七七)年  
一九七七年(二七八)年  
一九七八年(二七九)年  
一九七九年(二八〇)年  
一九八〇年(二八一)年  
一九八一年(二八二)年  
一九八二年(二八三)年  
一九八三年(二八四)年  
一九八四年(二八五)年  
一九八五年(二八六)年  
一九八六年(二八七)年  
一九八七年(二八八)年  
一九八八年(二八九)年  
一九八九年(二九〇)年  
一九九〇年(二九一)年  
一九九一年(二九二)年  
一九九二年(二九三)年  
一九九三年(二九四)年  
一九九四年(二九五)年  
一九九五年(二九六)年  
一九九六年(二九七)年  
一九九七年(二九八)年  
一九九八年(二九九)年  
一九九九年(三〇〇)年  
二〇〇〇年(三〇一)年  
二〇〇一年(三〇二)年  
二〇〇二年(三〇三)年  
二〇〇三年(三〇四)年  
二〇〇四年(三〇五)年  
二〇〇五年(三〇六)年  
二〇〇六年(三〇七)年  
二〇〇七年(三〇八)年  
二〇〇八年(三〇九)年  
二〇〇九年(三一〇)年  
二〇一〇年(三一〇)

一九 明淨直 その二

しみ、僧侶が武士に盡すのも、乃至さつばりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかであつて、理に従ふ事が流れるやうな根本性に因るのであるまいか。大和民族は十字軍や、フランス革命のやうな極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正と言ひ、理に鋭いと言ひ、感情の平靜を保つと言ひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であると言つた外人の批評は、あながち、てたらめの空世辭ではないと思ふ。

濁濁

清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、丁度、鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢濁濁を忌む事は、清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひのあり、温かみのある事を要する。譬へば、鏡は空白で正しく物



圓融の相  
澄徹の趣

を映ずれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映ずる事を要しないで、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のある事を要するやうなものである。

本來日本人は、明らかに事物を見る長所を有してゐるばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶、夜光珠の明である。我が國では、古來、襖、被が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、謠諷は明き心を現しながら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花をかざし、歌詠を贈答し、或は胃に香を焼き

むくつけき武人

(一) 梶原景季の故事

かざす(翳)

(二) 源義家の故事

(三) 木村重成の故事

審美眼

虚妄

首鼠兩端

しめるといふやうな嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の労働者がその日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を所持たぬ者はなく、そしてこれは外國の労働者に絶えて見ないところと言はれてゐる。大工、指物師の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手を盡すといふ嗜がある。これ等は何れも、大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫すと言つた一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふのである。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味するその厭ふところは、躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲る事、拗れる事、邪な







大立者

(一)文永十一年  
(二)弘安四年  
(三)九四一年

かなかつた點である。無論どこの國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、大和民族にも、利害勘定の行爲がなかつたとは言はれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴はないとも言はれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存したやうに思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚尊に見る事が出来る。あの日本武尊も素戔嗚尊系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素戔嗚尊系の大立者。これ等何れも向ふ見ずのやうでありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父の事とあれば、水火を辭せず、直前するといふ風があつた。直斷、決、勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つ英雄であつた。その他、<sup>(一)</sup>蒙古來寇の時に西海の將士が身命を捨てて防戦した態度を見よ。代々の武士が、







投影  
うつつた影。

北歐神話  
古代のスカン  
デナビヤ(今  
のスウェーデ  
ン)ノールウェ  
ーグ、デンマー  
ク、アイスラン  
ド等を含む)  
に住んだ民族  
に傳はつた神  
話。

印度の神話

印度に移住し  
たアーリヤ民  
族の間に發達  
した神話。

黄泉國  
夜見國と同じ  
い。暗黒の世  
界で死の國を  
指す。

常闇  
永久に暗黒な  
こと。

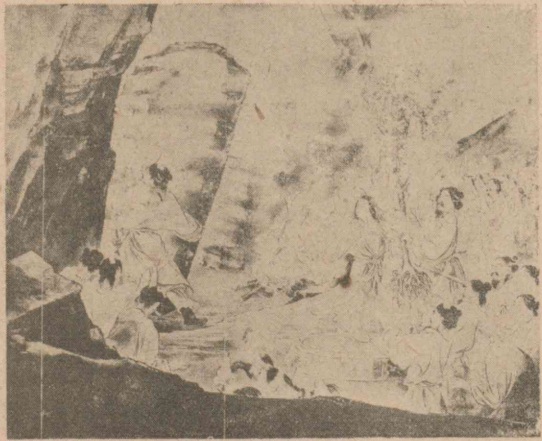
さばへなす  
五月の頃の繩  
のやうに。  
荒ぶる神。  
亂暴する神。

八百萬の神々  
國民の祖先で  
ある無数の神

天の安の河  
彌瀨の河、即  
ち幾瀬もある  
廣い河。或は  
銀河と言ふ。  
常世の長鳴鳥  
常世は常夜  
(常闇と同じ)  
長鳴鳥は雞の  
こと。

ところの太陽と結び附けてゐるところに、我が國民の光明を尙ぶ精神が十分に現れてゐると思ふ。我が國民が古來白色を尙んで來た事、殊に神道に於てそれが著しい事は、白の色がもつところの明るさを尙ぶのである。勿論神道に於ては、清淨を尙び、その無垢無染といふ清らかさを尙ぶところから來てゐるのもあるが、明るさといふ事もある。否、清らかさと明るさは元々共通のものである。國民思想、國民信仰の投影とも言ふべき神話その物が、既に光明を尙ぶ精神的特色を表現してゐる。明るく朗かな氣分。——これが我が國の神話のもつ最も著しい特色であつて、他國の多くの神話に見るやうな陰慘な氣分は少しも現れてゐない。北歐神話にしても、印度の神話にしても、陰慘な物語が可なり多く含まれてゐるのであるが、我が日本の神話には、かやうな物語は殆どない。

我が國には光明と歡喜とに満ちた高天原の神話はあるが、か



天の岩戸 (武内桂舟筆)

の佛教などといふ暗黒陰慘な地獄に相當するものは認められない。死者の行くべき世界として黄泉國の物語はあるが、決して地獄物語に對比すべきものではない。光明の神天照大神が天岩戸に隠れまして、天の下が常闇になつた時には、さばへなす荒ぶる神が所を得顔に荒びて、國民は大いに困つたのであるが、國民はかくの如き際に於ても、決して屈託したり、悲觀したり、失望落膽したりする事はなく、八百萬の神々は直ちに天の安の河原に集つて、盛んに火を燎やし、黎明を象徴するところの常世の長鳴鳥を鳴かし、天鈿女命をして滑稽な舞踊をなさしめ、八百萬の神々の笑ふ



世をはかなむ  
世の中を定め  
なく思ふこと  
無常を感ずる  
こと。

聲が高天原を搖動ゆりうごかしたとある。勿論これは神話物語であるが、かやうな神話物語は、光明を尙ぶ國民の精神から生れたものである。

かるが故に、國民は樂天的である。常に物を明るく見る。世をはかなむ思想は元來ない。物は見方によつて明るくも暗くも見えらる。すべての物を明るく見るのが日本國民の特性である。悪人はすべての事がらを悪意に解し、善人はすべての事がらを善意に解釋する。自ら明るい心持をもつてゐる者は、すべての事がらを明るく見るのである。

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時にあへらく思へば

この歌こそ、日本國民の物の見方を代表したものである。勿論一種の厭世思想の發生した事も否定する事は出来ない。しかし、それは多くは佛教の厭世的な思想の影響である。平安時代の貴

あへらく  
あしる。

頽廢的な暗い  
思想

不健全で陰鬱  
な思想。

(一)平安時代の文  
學者。清原元

輔の女。第六

十六代一條天

皇の皇后。定

子に仕へた。

(二)面白い季節は

正月、三月、四

月、五月、七月、八

月、九月、十一月、

十二月である

が、總體その

季節々々につ

いて一年中皆

面白いとの意

(三)比叡山の東塔  
の本堂。當山  
最初の建造物  
である。

族が頽廢たひ的な暗い思想に陥つてゐた事は、當時の物語類を見れば直ちに看取かんしよされる。しかし、同時代の清少納言はその隨筆枕草紙(一)に「ころは正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、ひとゝせながらをかし」と言つて、日本人特有の明るい見方をしてゐる。これが本來の日本精神なのである。

今一つ日本國民の光明を尙ぶ精神を現してゐるのは家屋である。殊に我が固有建築の典型であるとされてゐる神社建築に於てそれが著しい。概して宗教に關する建築物には陰鬱な物が多い。キリスト教會の如きは宗教的建物としては明るい方であるが、普通の我が國の家屋に比較すると、餘程陰鬱に出來てゐる。佛教の寺院建築に至つては一層それが甚だしい。就中、天台宗、眞言宗などはその極端な例である。天台宗の總本山延曆寺(三)の根本中堂ちゅうだうに參詣した人は何人も知つてゐる事であるが、案内者は日中でも蠟燭を點ともして案内する。それ程暗く出來てゐるのである。



顯著な對照  
著しく對立し  
てゐること。  
反對してゐる  
こと。

佛教で極樂淨土の事を一に寂光土じやくくわうどと言ふ。寂光土は後世發達した佛教では色々むづかしい理窟を附けてゐるが、本來の意味は、幽な光の國といふ事である。光明よりも寧ろ薄暗いのを理想とする考へ方から、極樂淨土を寂光土と言つたので、天台宗や眞言宗などで佛を安置する本堂を薄暗くする所以も此所にある。然るに神社の建築は四方明放あきほうしてある。これは佛教建築と極めて顯著な對照をなしてゐる。國民が樂天的の氣分に富んで居り、物事を悲觀的に考へる事をしないと云ふ事と、この光明を尙ぶ精神とは、相照應さうおウするのである。或は樂天的であり、餘り氣分の明る過ぎる日本には、深遠な哲學は生れないと云ふ者がある。これは多少理由のある言分である。

ふ。光明を尙び、物に屈託せず、若々しさを永久に失はず、常に朗かな心持を有し、萬難を排して進んで行く勇氣を失はない間は、我が帝國の前途は洋々たるものであつて、國を護るこの精神こそ、國の寶であると言はなければならぬ。——日本國民の精神——

前途は洋々  
前途の廣いと。  
(一)思想問題に關する講演を記したものである。

### 二〇 那須の與一の事

さる程に阿波、讃岐に平家に背いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、此所の洞より、十四五騎、二十騎うち連れ、馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より、年のよはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つ衣に紅の袴著たるが、

(二)源義經。

尋常に飾る

柳の五つ衣



舟のせがい

皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向つてぞ招きける。

矢面  
てだれ

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」と宣へば、「射よとにこそ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん」と申しければ、判官身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、「てだれども多う候なかに、下野國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官證據があるか、「さん候。かけ



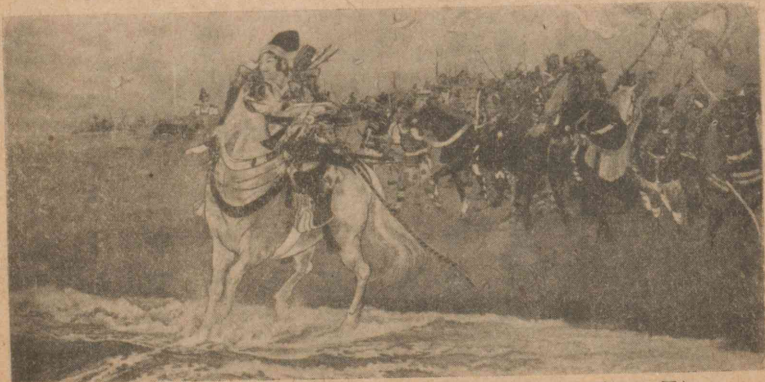
扇の的

小兵  
さん候

鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官さらば與一呼べ」とて召されけり。

きりふの矢

與一その頃は未だ二十許の男なり。裾に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂にもよぎをどしの鎧著て、あしじろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓脇に挟み、冑をば脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。判官「いかに與一、あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし」と宣へば、與一「つ



(尾形三月筆)



御説

かまつるとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、「さ候はばはづれんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ」とて御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與一が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろ

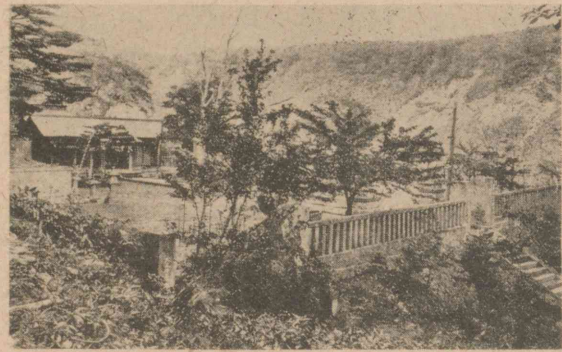
矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許うち入つたりけれども、

〔壽永四年。一八四五年。〕

くしに定まらず

くつばみ

神明



社 神 泉 温 須 那

なほ扇のあはひは七段許もあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れもはれならずといふ事なし。與一目をふさいいで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の権現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、こ



よつびいてひ  
ようと放つ  
十二束三ぶせ

えびら(籠)

(江戸幕府の儒  
官。名は直清。  
江戸の人。享  
保十九年(一  
七九四年)二  
年三十七。歿)

の矢はづさせ給ふな」と心のうちに祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみまれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。陸には源氏えびらをたゝいてどよめきけり。 — 平家物語 —

二一 仁は心のいのち

室鳩巢

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心

齒徳  
遜讓

死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、ものの哀れを知りて、常に活きたるものぞかし。よりにて、父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事を知り、不義を聞いては必ず恥づる事を知る。若し情なく哀れを知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもて言ふに、仁義禮智何れも心の徳にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁ならば、義も、禮も、智もその様ありその用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず。公の理にあらず。この故に仁に心の徳と言ひて、外に徳を言はず。仁に愛の理と言ひて、外に理を言はず。その言



豊臣時代の武  
將佐野了伯(二  
慶長六年(一  
年二六一年)  
四十四)歿

はざるところに深き意ありと知るべし。

それに就きて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主(一)天徳寺、豪健の勇將なりしが、ある時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聴きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師に言ひけるは、某は唯哀



天徳寺小堀平語を聴く  
(筆)

れなる事を聴きたくこそあれ。その心得して語り候へ」と言へば、法師「心得候」とて、佐佐木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺哀れが

雨しづくくと泣く

りて、雨しづくくと泣きけり。さて「今一曲前の如く哀れなる事を聴きたし」と言へば、那須の與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣のやからに「過ぎし日

合點する

の平家はいかゞ聴きつる」と言ふに、家臣ども「最も面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲共に勇烈なる事にて、哀れなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや、今に不審なる事に何れも申し合ひ候」と言へば、天徳寺驚きて「只今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて一力を落して候。先づ佐佐木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ池月を高綱に賜はるにあらざや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察してみられよ。哀れならぬ事かは」とて、しばしば涙を拭ひつゝ、暫しありて言ひけるは「また那須の與一も大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中へ乗入れて的に向ふに至るまで、源平兩家



武邊

迷惑す

鳴りを静めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし、馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察してみられ候へ。武士の道程哀れなるものは候はず、某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聴く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに各には哀れになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのもしからずこそ候へ」と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、固より仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて手荒き道なれば、言はゞ仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは眞の武にあらず。況やその餘の

忍びざるの心

事は、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば眞のものにあらず。これ即ち前に言ひし人に情あり、ものの哀れを知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙こぼすやうだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者と言はんに何の疑かあるべき。

— 駿臺雜話 —

二二 國威八紘に振ふ

高島米峯

我等は若い

青年は人生の花である。されど、唯若くして美しきが故に貴いのではない。希望に生き、意氣に燃えるが故に貴いのである。奉公の赤誠横溢し、純潔の眞情流露するが故に貴いのである。

既に花である。花ではあるが、僅かに槿花一朝の榮を誇つて、一夜

(一)思想家。明治八年(一八七五年)新潟縣に生れた。

赤誠横溢し眞情流露す

槿花一朝の榮











然るに千三四百年後の現代に於ては、東洋の天地は全く歐米文明の爲に征服し盡されたかの觀がないでもない。しかし、そのいはゆる西洋文明の生命もまた、必ずしも永い將來があらうとは思はれない。その後に来るべきものは、即ち東西文明の融合調和の上に築き上げられた新文化でなければならぬ。さうしてその使命は、當然東西文化合流の十字路に立つてゐる我が日本が負はねばならぬ責務であつて、これを果す事によつて、帝國の國光は推古天皇時代のそれに増して輝くのである。

曩に友邦滿洲國の獨立に次いで日本の國際聯盟脫退があり、最近極東の風雲殊に甚だ急にして、世界列國の關心は悉く我が進退に集つてゐる。曾ては支那と對等なる國交を得て満足したに過ぎなかつた我が日本は、今は寧ろその先進國として、はたまた彼の誠實なる友邦として、無限の信頼を捧げしめ、よつて以て新文化建設

の助力者たらしめなければならぬ。かくの如くして始めて、これを内にしては百姓昭明、これを外にしては萬邦協和、國威八紘に振つて、瑞を稱し祥を稱せざる者なきに至るであらう。



帝國實業讀本  
改制新版  
卷六  
終

附  
錄



一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

(甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ  
おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶

御機嫌 御本

(乙) 神さま 井上さん 太郎君

(丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし	あなたさま	この(お)かた その(お)かた	どの(お)かた どなたさま
わたし	あなた	あの(お)かた	どなた

三 動詞

(甲) 本來の敬讓語 (○印は連語を示した)

あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

あそばす・なさる(爲ル)

いらっしゃる(來ル、行ク、居ル)

おっしゃる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

(以上、尊敬の意を含むもの)

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存する、存し上げる(知ル)



たべる (食フ)

申す、申上げる (言フ)

まゐる (行ク、來ル)

拜見する (見ル)

拜借する (借リル)

拜讀する (讀ム)

拜聽する (聞ク)

○お目にかかる (面會スル)

お目にかける

御覽に入れる (見セル) (以上、へり下る意)

敬讓動詞のつくり方 (○印は連語を示した)

(乙)

遊ばす  
なざる  
下さる  
に、なる

御苦勞  
なざる  
下さる  
に、なる

○見て下さる、読んで下さる

(以上、尊敬の意を含むもの)

お届  
申す  
申上げる  
致す

お供  
申す  
申上げる  
致す

○お届けする、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」を付ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を付ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を付ける。

こんなに暑いのに……………。

お恥しい次第ですが……………。

(乙)

これは古い(の)です。

これは新しうございます。

それはお高い(の)です。

それはお珍しうございます。

五 形容動詞 (「お」「こ」を付ける)

それはお珍しからう。

若しお寒かつたら……………。

あそこはお静かでせう。

あそこはお静かでしたか。

そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。

ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

六 副詞

おまめに働きなさいませぬ。

ごゆつくりなさいまし。

ここはお静かではございません。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを  
用ひる。

あれは學校です。

あれは學校で ございます。

あのかたは先生で いらつしやいます。

大將はその時、少將で お出でになつた。



敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

- あそばす(爲ル)
- います、ます、まします(アル、居ル、行ク、來ル)
- おはす、おはします(同前)
- おほす(言フ、言ヒツケル)
- おほす、おほしめす(思フ)
- きこしめす(聞ク、飲ム、食フ)
- しろしめす(知ル、統べ治メル)
- たてまつる(著ル、乗ル)
- たまふ、たぶ(與ヘル)
- のたまふ(言フ)

(乙)

- まゐる(飲ム、食フ、著ル)
- みそなはす(見ル)
- めす(飲ム、食フ、著ル、乗ル)
- わたる(アル、居ル)
- へり下る意、丁寧の意を含むもの
- いたす、つかまつる(爲ル)
- うけたまはる(聞ク、承諾スル)
- さふらふ(アル、居ル)
- きこゆ、まうす(言フ)
- たてまつる、まゐらす(與ヘル)
- たまはる(貰フ、受ケル)
- はべり(アル、居ル)
- まかる(退ク、歸ル、行ク)
- まゐる(行ク)

國語假名遣一覽

わ (は)	わた(屬) はらわた(腸) このわた(海胆腸)	よわし(弱し) かわく(乾く) さわぐ(騒ぐ) すわる(坐る)	わ (は)	わで(井手一堰) ゐなか(井中一田舎、田園) ゐもり(井守一蝶蠟、堰)
わ(輪) くちわ(口輪一轡) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪)	こわ(聲) こわいろ(聲色) こわね(聲音) こわづかひ(聲遣) こわづくろひ(聲づくろひ) こわだか(聲高)	あわたどし(惶し) さわやか(爽か) たわいなし	わ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉一諺)	ゐ(井) ゐど(井戸) ゐげた(井桁) ゐぎき(井堰) ゐづつ(井筒) ゐくひ(井杭)
わ(廊) くるわ(廊)	わ(曲) うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫)	語の中や下に来る「わ」は右に 舉げた他は「は」を用ひる。例 (ば)	わり(割) ことわり(事割一理)	ゐ(藪) ゐ(率) ひきゐる(引率る一率る、將 もちゐる(持率る一用、以)
わ(輪) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪)	わ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉一諺)	川 澤 粟 瓦 雞 庭 桑 諏訪 安房 永久 繩 障 廻る 變る かはいら し等	わ(曲) うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫)	ゐ(藪) おほわ(大藪) おぐさ(藪草)
わ(輪) くちわ(口輪一轡) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪)	わ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉一諺)	ゐ(井) ゐど(井戸) ゐげた(井桁) ゐぎき(井堰) ゐづつ(井筒) ゐくひ(井杭)	わ(曲) うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫)	ゐ(藪) おほわ(大藪) おぐさ(藪草)







いさそし(續一動)  
 ばせを(芭蕉)  
 みさを操  
 やまら(徐)  
 たまやか(嬋娟)  
 たまやめ(手弱女)  
 をとり(四)  
 をかす(犯す)  
 まがむ(拜む)  
 まどす(威す)  
 をす(食す)  
 まさむ(治む)  
 をさむ(納む)  
 をさむ(藏む)  
 をしむ(惜しむ)  
 をしむ(教ふ)  
 をふ(終ふ)  
 をはる(終る)  
 をめく(叫く)  
 をのく(戦く)  
 まどる(踊る一躍、踴)  
 をる(居る)  
 あをむく(仰く)  
 かをる(香る一薫)  
 まをす(申す)  
 しをる(撓る)  
 をかし(可笑し)  
 をし(愛し)惜  
 くちをし(口惜)  
 をさなし(幼し)

さそ(竿)  
 つりさを釣竿  
 みさを水竿(棒)  
 うを(魚)  
 いま(魚)  
 ひま(水魚)  
 しらま(白魚)  
 いまのめ(魚の目一眈)  
 かつを(鯉)  
 右の外上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば  
 親 沖 弟 鬼 祖父 齋  
 遅く 恐し等  
 顔 潮 火の穂(焙)  
 氷 郡 蟋蟀 透る 滯る  
 直し 遠し 通す等  
 中下に「ふ」を用ひ、文語では  
 轉呼音で「お」と發音するもの  
 がある。例へば  
 問 思 買 添  
 願 貫 拾 習  
 訪 沿 乞 扱  
 害 遠 誘 纏  
 事 佛 叶 憂

ち(父)  
 おほち(祖父)  
 をち(伯父一叔父)  
 ちち(祖父)  
 ちち(老翁)  
 をち(小父)  
 すち(筋)  
 うち(氏)  
 ち(路)  
 こうち(小路)  
 ひち(肘)  
 あち(味)  
 あち(鱈)  
 かち(棍)  
 かち(楮)  
 かち(鍛冶)  
 ひち(泥)  
 ふち(藤)  
 ふち(かま(藤椅)  
 かうち(麴)  
 くち(鯨)  
 ことち(琴柱)

候ふ 扇ぎ 仰ぐ 葵 擗  
 近江 今日 昨日 倒る 貴  
 し 尊ぶ等

ねち(鏝)  
 わらち(草鞋)  
 なんち(汝)  
 なめくち(蜘蛛)  
 もみち(紅葉)  
 はち(耻)  
 ふちな(蒲公英)  
 あち(紫陽花)  
 みそち(三十)  
 よそち(四十)  
 いそち(五十)  
 むそち(六十)  
 かち(搗布)  
 ちちむ(縮む)  
 ねち(捻る)  
 とち(閉ちる)  
 とち(綴ちる)  
 はち(耻ちる)  
 よち(攀ちる)  
 ひち(濡ちる一泥)  
 もち(振ちる)  
 ねち(俵る)  
 あち(味ふ)  
 「ぢ」を用ひるのは右の語だけ  
 で、他は「じ」を用ひる。例へ  
 ば  
 虹 雉 簞 脚躑 交る  
 詰る 辱し 著し等

ず (3)

かず(數)  
 きず(傷)  
 くず(葛)  
 はず(筈)  
 ゆはず(弭)  
 もず(鴟(百舌鳥)  
 みず(蚯蚓)  
 はずみ(機)  
 ねずみ(鼠)  
 あんず(杏)  
 すず(鈴)  
 すず(錫)  
 すずむし(鈴蟲)  
 すずき(鱸)  
 すずな(菘)  
 すずしろ(大根)  
 すずめ(雀)  
 すずし(生絹)  
 すずろ(漫)  
 すず(數珠)  
 ずき(從者)  
 ずはえ(條)  
 いしずる(礎)  
 くず(國柶)  
 こずえ(梢)  
 かならず(必ず)  
 たたずむ(佇む)

なずらふ(準ふ)  
 ひずむ(歪む)  
 すずし(涼し)  
 すずり(硯)  
 まず(交す一混)  
 ゆず(柚子)  
 右の他は「づ」を用ひる。例へ  
 ば  
 水 屑 泉 雷 酸漿 渦  
 煩ふ 貧し 續く かゝす  
 らふ等



三  
木元  
滿

昭和七年十一月一日印刷  
 昭和七年十二月三日發行  
 昭和八年七月二十日訂正再版發行  
 昭和十一年九月十五日訂正三版發行  
 昭和十六年九月三日訂正七版發行  
 昭和十六年九月七日訂正七版發行

定價  
 卷一—卷六 金六拾錢  
 卷七·卷八 金五拾四錢  
 卷九·卷十 金五拾壹錢



帝國實業讀本 改新制版

編者	芳賀	矢野	一
訂補者	上田	萬年	
同發行者	長谷川	福平	
發行者	合資會社 富山	山房	
代表者	東京市神田區神保町一丁目三番地	守正	
印刷者	吉坂	了太	
	東京市王子區神谷町一丁目四八二番地		

發行所

合資會社 富山房

東京市神田區神保町一丁目三番地  
 電話神田二七一—二七八 振替口座東京五〇一



広島大学図書

2000038644





Handwritten signature or scribble in black ink at the top left.

Champion

Champion

Champion

Handwritten text in black ink at the bottom left, possibly a date or reference number.

Handwritten text in black ink at the bottom center, possibly a name or address.



信託 代理人封鎖財産権の移轉又は設定を  
なす一定の目的に従ふ

信託財産の移轉